

増野悦興の晩年の『日記』と日本同仁基督教会（二）

滝澤民夫

はじめに

増野悦興ましのよしかき（一八六五～一九一一）晩年の一九〇九～一九一一年の『日記』三冊のうち、本稿では一九一〇年の第廿三号を翻刻し、注と解題を加えて紹介をする。逝去前年の増野は日本同仁基督教会飯田町教会牧師として、最後の静岡～関西への伝道を行った。病勢は悪化するが、この年も日々頻繁に米国人宣教師と書簡などのやり取りをしており、その活動と交流についても考察したい。増野は宣教師ケールン著『活宗教の要素』（日本同仁基督教会、一九一〇年）の刊行にも尽力しており、この時期のユニバーサリスト教会の伝道姿勢についても論じる。本史料紹介は増野研究に関する史料的補遺の第二回である。翻刻にあたっては、確認できる人名に「補足」を加え、事項等については月毎に注釈を加え、解読の一助とした。人物については、確認できた場合に生年・没年を入れた。

キーワード…日本同仁基督教会、ブラックマーホーム、アズバン、ハーサウエイ、ロブデル、ケールン

追記 二〇二二年三月一日発行『同志社談叢』第四一号の史料紹介のうち、表題及び解題中の「日本基督教同

仁教会」を「日本同仁基督教会」に訂正します。誤りの原因は、現在の同仁教会は「キリスト教同仁社

「団」となっており、教会に調査でうかがううちに、「基督教同仁教会」と記してしまいました。英文タートルも、The Japan Christian Dojin Church を The Japan Dojin Christian Church と訂正します。*) 迷惑をおかけしますが、よろしくご寛恕ください。拙著『増野悦興研究』では「日本同仁基督教会」と表記しています。

増野悦興『懐中日記』第廿三号 一九一〇(明治四三)年 四五歳

見開き頁 上部書き込み 殺我

- 一月一日 雨 終日閉居 水平「三治」ヨリ来状 水平、藤原へ出状
- 一月二日 晴 午前礼拝説教ヲナス「神心克服」 星野、秋田美以教会へ出状
- 一月三日 晴 終日閉居 松浦「政泰」へ蜜柑ヲ贈ル
- 一月四日 雨 ブラックマー女塾⁽³⁾聖書講義 保羅ノ生涯及教訓ヲ結了ス⁽⁴⁾
- 一月五日 晴 聖書前夜ト同断 祈祷会「更生ハ我等ガ靈性ニ於テノミ能クスベキ事ナリ」⁽⁵⁾
- 一月六日 晴 寒ノ入 藤原ヨリ来状 至水道橋稅務署
- 一月七日 晴 藤原、西尾幸太郎⁽⁶⁾、水平、アズバン⁽⁷⁾へ出状 断髪 水平ヨリ来状
- 一月八日 曇 夜雨 訪一野 逸見事務所へ来訪 弘文堂、波多野「培根」⁽⁸⁾へ出状
- 一月九日 晴 礼拝説教 ケールン⁽⁹⁾ 鈴木十郎、藤原ヨリ来状 鈴木、大熊、駒込(三)へ出状、広文

堂ヨリ「高貴ナル人格」⁽¹⁰⁾五部送越ス

一月十日 曇 訪ケールン、三菱銀行、水平、アズバン

一月十一日 雪 広文堂へ出状 米人スウィート⁽¹¹⁾飯田町会堂へ来訪、之ニ新著ヲ進呈ス

一月十二日 曇 夜来大雪 伊予野田村河村高輔(三三)へ出状 東京教会総会ヲ開キ左ノ役員ヲ撰定ス
幹事(会計)岡田「正男」⁽¹²⁾、(記録)逸見、理事小沢、渡辺、勝田、執事佐藤、岡田

一月十三日 雨 藤原、岡田正男、広文堂へ出状 広文堂ヨリ書籍二十五部送越ス 鈴木十郎ヨリ来状

一月十四日 曇 大熊へ出状 秋田ヨリ植木昨日死去ノ電報来ル 水平、亀井家ヨリ来状 秋田へ発電

一月十五日 雪 水平、植木定幹へ出状 藤原ヨリ来状

一月十六日 晴 礼拝説教 松尾「音次郎」⁽¹³⁾大熊、植木定幹ヨリ来状 ロブデル⁽¹⁴⁾、岡田恒輔ヨリ来状

一月十七日 晴 約束 日本生命⁽¹⁵⁾、広文堂 至第百銀行、広文堂 ロブデル、中里へ出状 谷寅藏来訪

一月十八日 晴 広文堂、水平へ出状 真保事務所ニ来訪

一月十九日 晴 至日本生命 駒込(四)、平野、前本、竹中⁽¹⁶⁾与三郎へ出状 丁酉会、孔子会、津和野小

学同窓会ヨリ来状

一月二十日 曇 坂本、前本ヨリ来状

一月二十一日 雨 永見、小学同窓会へ出状 前本、大島ヨリ来状 訪前本

一月二十二日 雨 水平、新島「公義」⁽¹⁷⁾(記念はがき)ヨリ来状

一月二十三日 曇 訪佐治「実然」⁽¹⁸⁾水平へ出状 平野ヨリ来状 礼拝説教 松尾

一月二十四日 晴 至小石川区役所 維新志士遺墨展覧会

- 一月二十五日 曇 訪宮田 安部「磯雄」へ出状
一月二十六日 雪 藤原、石井安太郎ヨリ来状
一月二十七日 晴 訪アズバーン 松尾へ出状 新島家ヨリ記念摺物来ル
一月二十八日 晴 訪松尾寓、アズバーン 水平ヨリ来状 水平へ出状
一月二十九日 曇 松尾ヨリ来状 訪アズバーン
一月三十日 雨 礼拝説教 松尾 鈴木醇ヨリ来状 藤原、駒込(五)、点灯会社、自由堂へ出状、
一月三十一日 晴 訪アズバーン、家主 点灯会社、大工へ出状

(1) 水平三治(一八六二—一九四四)は前年の一九〇九年二月一六日に秋田教会牧師に任命されている。社会運動家でもあった水平と増野との関係は調査中である。増野の逝去後しばらくして教会から離れ、後に労働党から秋田市議に立候補し、当選した。

(2) 松浦政泰(一八六四—一九一九)は同志社女学校教頭時代に大阪キリスト教徒青年会の同志として、『基督教青年』第二号に「青年会の大団結」を寄せて以来の旧友。新島襄逝去後の一八九〇年二月四日に大阪青年会館で開催された「故新島襄先生紀念演説会」で増野は司会を務め、松浦は「新島先生伝道の精神」を演説している。「教報演説」「基督教青年」第六号、一八九〇年二月一四日。一九〇一年からは日本女子大学教授として女子中等教育に尽力し、増野も女子教育論で共鳴していた。

(3) ユニバーサリスト教会(一九〇九年八月二六日から日本同仁基督教会)の婦女子救済施設ブラックマーホーム(The Blackmar Home for Girls)で、増野は定期的に聖書講義をしていた。ブラックマーホームについては、キャサリン・エム・アズバン『夢が実を結ぶまで—ブラックマーホーム二十年の物語』(広瀬文枝訳、キリスト教同仁社刊、一九八六年。以下、『夢が実を結ぶまで』)がある。増野との関係は解題で触れる。

(4) 増野は「保羅ノ生涯及教訓」について、パリサイ主義からキリスト教徒に回心したパウロの生涯に触れて、

悔改信仰を説くパウロの書翰と実践修養を説くヤコブの書翰は新約聖書中の双璧だと、としていた（「救いの説上・下」『成民』第七号・第九号。「救済の本義」と改題して『高貴なる人格』に収載。「救いの説上・下」については『増野悦興研究』第八章第二節に記した）。

(5) 「更生と靈性」に関しては、同じく「救いの説上・下」において、人は「真面目に心靈上道德上の問題を考へて日を送り、徳を修め道を励み我が身の改善進歩を企図するに至る」が、永久の改進が更生であり、それは歳月を経て行われると述べていた（『増野悦興研究』三七五頁）。

(6) 西尾幸太郎（一八六八―一九四二）は当時組合教会の平安教会牧師で、『日本組合教会便覧』の編集担当者だった。妻は増野咲子の妹テルで、京都の自宅には咲子と長男肇が寄寓していた。その後、西尾も波乱に満ちた生涯を送る。実弟西尾寿造は陸軍大将で、アジア太平洋戦争後巣鴨拘留所に収監された。

(7) アズバン (Miss Catherine M. Osborn, 一八五九―一九二五) はイリノイ州ワールンに生まれ、シカゴ大学を卒業後、一八九五年に三五歳で日本に着任した。翌九六年に婦女子救済施設ブラックマーホームを設立し、その後二七年間にわたって米国ユニバーサリスト教会員として婦女子救済に尽力した。増野との関係は解題で触れる。

(8) 波多野培根（一八六八―一九四五）は増野悦興の従弟で三歳年下。増野に誘われて同志社英学校に学んだ。漢学者の父波多野達枝の弟が増野の父増野貞吉である。刎頸の友でもあり、波多野が同志社普通学校教頭をしていたこともあり、晩年の増野は京都に暮らす妻子のことや父の養育費のことも含め、家庭内のことを相談していた。

(9) ケールン (Gideon Isaac Keirn, 一八五四―一九二二) はケート牧師没後に再来日し、日本同仁基督教会を増野とともに支えた。この年三月、増野自ら校正もしてケールン著『将来日本の宗教』を、なぜか伝道先の大阪の黒田活版所で印刷し、内務省に出版届を提出している（三月二十二日）。増野が訳した可能性が高い。日本同仁基督教会とケールンの履歴と増野との関係は解題で触れる。

(10) 『高貴なる人格』はこの年頭に広文堂書店から出版された。一月二日の『東京朝日新聞』広告「高貴なる人格」には、「成民会長 増野悦興先生著 新形函入美本 金七十銭 送料八銭」とある。晩年主催した「宗教道

德的修養機関」成民会の機関紙「成民」と『丁酉倫理講演集』の講演録・寄稿などを編集した増野のキリスト教思想の集大成である。詳細は『増野悦興研究』第九章第一節に記した。

- (11) スウィートについては、現時点では不詳である。なお、『懐中日記』第廿二号にある一九〇九(明治四二)年六月五日のリードは、一九〇二年頃フィリピンでの伝道活動中、日本での休暇中にブラックマーホームを訪れた米国ユニバーサリスト教会宣教師ミス・アナベル・リードではないかと考えられる(『夢が実を結ぶまで』一〇六頁)。

- (12) 東京教会は本部のある飯田町教会と九段坂下の教会(中央会堂)があった。アズバン著『夢が実を結ぶまで』を訳したホームの卒業生広瀬文枝は、「九段坂下にあった小ぢんまりした教会は入り口を入った小さいホールの壁側に鳩山一郎と書かれた名札を筆頭に信者の名札が掲げられている」(『先生の思い出』「ブラックマーホーム編」ハサウエー先生の思い出)キリスト教同仁社団、一九八五年、七〇八頁)と記している。

- (13) 人物は不詳だが、教会会計の岡田正男は頻繁に日記に出てくる。

- (14) 松尾音次郎(一八六五〜不詳)は同志社予備校発起人活動以来の同期生だが、これ以前から教会員となり、増野の説教の代理を務めるなどしている。

- (15) ロブデル(Lobbell, Nelson J. 一八七六〜一九六四)はニューヨーク州オントリオ郡ピクター村近くの農場に生まれた。高校卒業後、ニューヨーク州の高校で副校長を務め、一九〇五年にタフツ神学校を終えて牧師に任命された(Russell Miller "The Larger Hope, The Second Century of the Universalist Church in America 1870-1970", p. 440)。一九〇六年に来日し翌年妻を迎えるために米国に戻り、その後、夫妻で静岡教会に赴任している。一九二〇年五月には娘が誕生している(『夢が実を結ぶまで』一八五頁)。増野との関係は解題で触れる。

- (16) 岡田恒輔(一八八三〜一九六〇)は川越中学校第一回卒業生で、同校第七代校長となる。一九二〇年一〇月一八日、増野の一〇年忌に遺稿集『筆華舌英』を自費出版して、全国の公立図書館に配った。卒業生としては退職後の増野を最も慕い、第一高等学校・東京帝国大学文学部哲学科に学ぶなかで、しばしば自宅を訪ね、往復書簡も多数交換している。岡田の遺品が見つければ増野の書簡も発見されるのだが、現時点では不明である。

(17) 増野は前年の一九〇九年に仁寿生命(月八七銭)に一月〜四月まで、日本生命(一回二円八〇銭)に三・六・九月の三回、翌一九一〇年には四・六・一〇・一二月の四回生命保険料をかけている。これは月九一銭となる。仁寿生命保険から日本生命保険に切り替えたと考えられる。死去した場合の債務返済と長男肇の養育費が目的だった。一九一一年一〇月の死去に際し、日本生命会社尋常終身保険金五二八円を甥増野公平が受け取っている。その配分を妻増野咲子から委託されていたのが安部磯雄である。詳細は『増野悦興研究』第九章第二・第三節に記した。

(18) 竹越与三郎(一八六五〜一九五〇)ではないかと思われる。

(19) 新島公義(一八六〇〜一九二四)は新島襄の弟双六の養子で、同志社を退職後は、東京で暮らした(聞き手河野仁昭「新島得夫氏(社友)に聞く―父公義と新島家」『同志社時報』第七五号、一九八三年一〇月)。増野とは親しく、同志社英学校を退学して日向伝道を行っていた増野が一八八七年に新島に送った写真を新島が「友人増野悦興君所贈」と裏書きして書斎に掲げていたと増野に伝えている(「先生永眠後第二十日」『基督教青年』第六号、一九九〇年二月一四日)。東京に出てからも交流があったと思われる。

(20) 佐治実然(一八五六〜一九二〇)は浄土真宗の僧侶からキリスト教徒になり、日本ゆにてりあん弘道会長として「仏教的ユニテリアン」とも称された。晩年、孔子教会員として「儒教的ユニバーサリスト」的立場をとった増野に、人間的な信愛を示して、生活苦の増野に執筆の場を提供した。

(21) 安部磯雄(一八六五〜一九四九)は増野と同年生まれで、同志社英学校では一級上だが、ともに同志社を退学している。前年一九〇九年の『懐中日記』第廿三号に最も多く名前が記されており、岸本能武太とともに財政(負債)整理から、翌年の葬儀まで、献身的に増野一家を支えた。詳細は『増野悦興研究』第九章第二節に記した。

二月一日 晴 家主来訪 水平、藤原ヨリ来状

二月二日 晴 約束都屋 大工、ロブデルへ出状 至都屋

- 二月三日 晴 朝硯氷ル 駒込(三)^①へ出状 大工来ル 小泉来訪
- 二月四日 晴 大熊来訪 隣ノ家へ移転ス
- 二月五日 曇 断髮ス 小泉来訪 平岡埼玉県ニ行ク
- 二月六日 晴 礼拝説教 ケールン 訪アズバーン
- 二月七日 晴 岡田正男へ出状 訪堀江、ケールン
- 二月八日 晴 夕雨 ロブデルヨリ来状 午前十一時新橋発^②午後五時半静岡着^③機陽館ニ投ズ
- 二月九日 晴 駒込へ出状 訪ロブデル、伊藤 石井、田中、ロブデルニ伴ハレ江尻ニ行ク
- 二月十日 晴 昼食後機陽館ヲ引払ヒ馬場町山名方ニ移転ス 駒込(三、五)、松浦、鈴木直風へ出状
伊藤来訪
- 二月十一日 晴 平岡、山崎、水平、北文館へ出状 ロブデル来訪
- 二月十二日 晴 訪ロブデル、伊藤 井上医学士ヲ訪ヒ診察ヲ受ク
- 二月十三日 晴 午前教会ニ出席ス ロブデル説教 山崎、安部、藤原ヨリ来状 ケールン、平岡(五)へ出状
- 二月十四日 晴 安部、藤原、野中、津和野社へ出状 津和野社、丁酉会ヨリ来状 斎藤来訪 訪波多野
- 二月十五日 晴 平岡、藤原ヨリ来状 井上病院ニ至ル 訪伊藤宅
- 二月十六日 曇 訪ロブデル宅 伊藤、藤井来訪 藤原、小沢へ出状
- 二月十七日 雨 訪ロブデル 至静岡銀行 斎藤来訪
- 二月十八日 晴 訪伊藤、石井 井上病院ニ至ル 野中ヨリ小包来ル 山本(書留)、平岡(一、三)へ

出状 岡田正男へ出状

二月十九日 晴 伊藤来訪 伊藤、ロブデルト長谷川歯科医ヲ訪フ 安部ヨリ来状 駒込(五)へ出状

二月二十日 晴 教会礼拝ニテ説教 神ヲ知ルノ道⁽⁴⁾ 会衆十八人 山本ヨリ来状 アズバン、野中(一、九)

へ出状

二月二十一日 晴 三宅龍太郎ヨリ来状 三宅へ出状 訪ロブデル、製茶会社 至静岡銀行

二月二十二日 晴 ケールン氏昨夜来静、氏ヲロブデル氏宅ニ訪フ 四時半ケールン氏ノ帰京ヲ送リテ停車

場ニ至ル 野中ヨリ来状 宮田へ出状(二) 至富士製茶会社

二月二十三日 曇 藤原、波多野、安部(書)、松尾、松浦、水平へ出状 ロブデル、加藤テイ来訪

二月二十四日 晴 笠間ハル、斎藤来訪、三宅、藤原ヨリ来状

二月二十五日 曇 約束 正午十二時ロブデル午饭 伊藤、西岡、堀ト共ニロブデルニ招カレ昼食ス 北文館、

松尾ヨリ来状 三宅、藤原、松尾へ出状

二月二十六日 雨 安部、亀井家、同志社校友会ヨリ来状 亀井家、校友会、駒込(五)、北文館(、四二)

へ出状 斎藤来訪

二月二十七日 雨 教会礼拝ニテ説教 真理ト自由⁽⁵⁾ 伊藤来訪 水平、松尾、大熊ヨリ来状

二月二十八日 曇 約束 新聞取次所 訪ロブデル 至新聞取次所、銀行 日景「」本間、平岡へ出状

(1)「駒込(三)」は高利貸返済金三円のことである。高利貸への負債整理については解題で触れる。

(2)二月八日から四月五日まで五七日間の静岡・名古屋・京都・大阪への伝道が最後の地方での布教活動となつた。

(3) 静岡教会ではロプデル夫妻が地道な活動をしていた。同教会については調査中である。

(4) 「神ヲ知ルノ道」について晩年の増野は、「道徳的心情ヲ有シ基督言行ノ真価値ヲ理解スル者ガ進ンデ靈ナル神ヲ認識スルニ至ルハ唯一歩ノミ」(「靈ナル神ノ認識」『四十年春 秋田伝道』説教草稿・木村滋子蔵増野悦興文書「仮目録」P12)と記している。

(5) 「真理ト自由」について晩年の増野は、「神ノ言葉即チ真理ハ決シテ聖書ノ中ノミニ限ラズ」、「宜シク經典ヲ学ブベシ、而シテ之ヲ樂ムノ域ニ進ムベシ」として、「今生マレシ嬰兒ノ乳ヲ慕フ如ク汝等心ヲ養フ真ノ乳ヲ慕フベシ」(「ペテロの第一の手紙二章2」)に触れて、「神ニ対シテハ赤子ノ慈母ニ於ケルガ如ク真理ニ対シテハ其ノ母乳ニ於ケルガ如クナルベキナリ」(「真理ト自由」『聖書講義』草稿・木村滋子蔵増野悦興文書「仮目録」P11)と記している。

三月一日 晴 奨学会ヨリ来状 水平、松浦へ出状 午前十時静岡ヲ発ス、伊藤「」斎藤送ル 午後

三時四十分名古屋着志那忠支店ニ投ス 夜藤原来訪

三月二日 雨 訪長野、藤原 長野へ出状

三月三日 晴 午前八時十四分名古屋ヲ発ス 藤原送ル 午後一時半京都着 波多野方ニ至ル

三月四日 曇 雪 午前十一時京都発午後一時前大坂着、小西旅館ニテ昼食、江戸堀北通一丁目九四飯田旅

館ニ投宿ス

三月五日 曇 雪 世界社、宇佐美ヲ訪ヒ、天満黒田活版所ニ至ル 波多野、ケールン、駒込(一、五)「」

山崎へ出状

三月六日 曇 雪 鈴木直風(書留)、平岡、ロプデル、北文館へ出状 午前及夕大坂教会ニ至ル

三月七日 曇 外出セズ原稿ノ整理ニ従事ス

- 三月八日 晴 堺ニ鈴木宅ヲ訪ヒ、浜寺公園ニ遊ビテ帰ル 水平ヨリ来状 夕大坂教会ニ至ル
- 三月九日 曇 鈴木直風、ケールンヨリ来状 水平、駒込(二、五)、第百銀行へ出状 至黒田活版所
夕大坂教会ニ至ル
- 三月十日 晴 ケールン、松浦、藤原へ出状 鈴木壽一ヨリ来状
- 三月十一日 晴 断髮 奨学会、第百銀行ヨリ来状 奨学会、アズバンへ出状 夕大坂教会祈祷会ニ列ス
- 三月十二日 曇 至山口銀行、黒田活版所 午后宝塚ニ至 大阪郵便局へ出状
- 三月十三日 晴 亀井家ヨリ来状 午前及夕大坂教会ニ至ル
- 三月十四日 晴 至黒田活版所 神戸ニ行ク ケールンヨリ小包、丁酉会、北沢秋野ヨリ手紙来ル
- 三月十五日 雨 北沢、坂本直三郎、黒田活版所へ出状 訪宮川
- 三月十六日 雨 至活版所 坂本来訪 ケールンへ出状 ケールン、ロプデル、松浦ヨリ来状
- 三月十七日 晴 ケールン、ロプデルへ出状 「日本将来の宗教」ノ校正ヲナス 西尾ヨリ来状
- 三月十八日 晴 午后住吉公園ニ散歩ス 津和野社ヨリ来状
- 三月十九日 雨 至黒田活版所 ケールンヨリ来状 ケールン、平岡(四、三六)、駒込(五)へ出状
- 三月二十日 晴 午前九時半発京都ニ至リ波多野ニ泊ル
- 三月二十一日 曇 訪磯江
- 三月二十二日 雨 午后〇時半京都発大阪ニ帰ル 水平、藤原ヨリ来状 内務省へ「将来日本の宗教」出版
届及ビ納本出ス
- 三月二十三日 曇 岸田蒔夫ヨリ来状 岸田、ケールン、黒田活版所、前本(六)、波多野、水平へ出状

訪基督教世界社

- 三月二十四日 晴 宮田ヨリ来状 至築港 坂本来訪
三月二十五日 晴 訪栗山 宮田(二)、長野へ出状 孔子教会ヨリ来状
三月二十六日 雨 前本ヨリ来状 安部(書留)、黒田印刷所へ出状
三月二十七日 晴 ケールン、長野、前本ヨリ来状 至大阪教会 ケールンへ出状
三月二十八日 雨 伊藤、藤原へ出状 午后御影加藤宅ニ神学会ニ会ス
三月二十九日 雨 駒込(三、五)、松浦、波多野へ出状
三月三十日 雨 至黒田印刷所

三月三十一日 曇 黒田印刷所、ケールン(原稿)へ出状 阪本^{マユ}来訪 アズバンヨリ来状 アズバンへ出状

(1) 名古屋教会では、かつて赤司繁太郎が牧師として活動していた。ただ、増野と赤司との交流を知る資料は現時点では確認できていない。

(2) 京都の長者町室町西入には妻子が身を寄せていた平安教会牧師西尾幸太郎宅があつたが、前年もこの年も立ち寄った記載はなく波多野培根宅に厄介になっている。長男肇への肺病罹患を避けた妻咲子は、一九〇九年三月三〇日から一二年二月二六日まで京都市立高等女学校助教諭心得として勤務しながら、息子を養育している。詳細は『増野悦興研究』第九章補論(3)に記した。

(3) 大阪では大阪教会での伝道を行いながら、病身にもかかわらず二九日間も滞在している。これは理由は分らないが天満の黒田活版所からケールン著『日本将来の宗教』を印刷するためと考えられる。三月一七日には印刷稿の校正もしている。しかし、伝道の記録はこの年も残されていない。

(4) 黒田活版所については、現時点では不詳である。

(5) 東京目白のキリスト教同仁社団図書室(資料室)蔵のケールンの著作は、『日本将来の宗教』(日本同仁基督

教会本部、一九一〇年)のほかに一五冊の小冊子がある。ケールンの活動と著作内容は解題で触れる。

四月一日 曇 ロブデルヨリ来状 ケールン、平岡へ出状 至黒田印刷所 午後三時半大阪発夕方京都

二着波多野ニ至ル

四月二日 雨 晴 黒田印刷所ヨリ来状

四月三日 晴 夜雨 午前九時半京都発午後四時半静岡ニ着シ清鶴楼ニ投ス

四月四日 晴 訪ロブデル、伊藤 坂本、黒田印刷、平岡へ出状

四月五日 晴 波多野、基督教世界へ出状 午前七時半静岡発正午過新橋ニ着⁽¹⁾午後帰宅ス 自由堂、ケールン、山崎、北文館へ出状 長野ヨリ来状

四月六日 曇 夜雨 駒込(五)、安部、黒田(四) 新島へ出状 奨学会、津和野社ヨリ来状 佐藤、山崎来訪

四月七日 晴 小久保ニ至リ診察ヲ受ク⁽²⁾ 宇佐美、加藤、佐藤(ケールン)、水平へ出状 安部、平野ヨリ来状

ヨリ来状

四月八日 晴 断髪 奨学会(寄附申込)、平野、伊藤、大倉、中嶋徳蔵⁽³⁾へ出状 山崎来訪

四月九日 曇 午后雨 訪安部 駒込(三)、タイムス⁽⁴⁾へ出状 日景、本間ヨリ来状 波多野、長野へ出状

四月十日 雨 訪山本、小久保 北沢秋乃、伊藤、黒田印刷所ヨリ来状 伊藤、大工へ出状

四月十一日 晴 藤原ヨリ来状 藤原、日景「」本間へ出状

- 四月十二日 雨 中島徳蔵、亀井家、栗山藤次郎ヨリ来状
- 四月十三日 晴 大工ヨリ来状 村井「知至」⁽⁵⁾へ出状 ケールン、アズバン来訪
- 四月十四日 晴 松尾、北文館へ出状 坂本、三町来訪
- 四月十五日 晴 松尾、村井ヨリ来状 夜松尾来訪 タイムスへ出状
- 四月十六日 晴 佐藤潔、牧野へ出状 牧野虎次⁽⁶⁾ヨリ来状
- 四月十七日 晴 中島へ原稿出ス 小山正武⁽⁷⁾ヨリ来状 訪松浦
- 四月十八日 晴 伊藤、水平、ロプデルへ出状 水平ヨリ来状 ケールン、山崎来訪
- 四月十九日 晴 駒込(三)、大倉、藤原、波多野、坂本(冊子)、小山、留岡「幸助」⁽⁸⁾へ出状 至第百、
日本生命 望月ヨリ来状
- 四月二十日 晴 大倉、留岡ヨリ来状 村井、佐藤、宮田へ出状 至ブラックマーホーム
- 四月二十一日 晴 日景「」本間へ出状 藤原ヨリ来状 岡田、逸見来訪
- 四月二十二日 雨 村井、佐藤、藤原(長野結婚)ヨリ来状
- 四月二十三日 晴 訪葛岡、アズバン 藤原へ出状
- 四月二十四日 晴 午前教会ニ出席ス 訪告森寓 岡田、藤原へ出状
- 四月二十五日 曇 風 岸本「能武太」⁽⁹⁾、波多野へ出状 丁酉幹事ヨリ来状
- 四月二十六日 晴 午前飯田町本部ニ至ル
- 四月二十七日 晴 税務署へ所得届出ス 仲田善治来訪 波多野ヨリ荷物着ス 佐藤へ出状
- 四月二十八日 雨 前本、波多野ヨリ来状 波多野、前本へ出状

四月二十九日 晴 前本、西尾、駒込(四)へ出状

四月三十日 晴 約束丁酉会 至図書会社 丁酉会研究会¹⁰二列ス

(1) 静岡・名古屋・京都・大阪への伝道の帰途、再度静岡教会に寄り、ロペデルを訪問し帰宅した。長旅は体調に悪影響を与えたと考えられる。

(2) 小久保医院への通院は、年末には来診になる。九月末からは小久保医師の指示により、朝・昼・晩の検温を始める。

(3) 中島徳蔵(一八六四―一九〇〇)は哲学館(東洋大学の前身)講師。増野が主催した成民会講演会の講師を務めるなど、肝胆相照らす仲だった。哲学館事件で退職するが、後に東洋大学学長となった。

(4) 「タイムス(六)」は高利貸への返済金。なぜかこの年の金銭支出簿には記載がない。「駒込」とは別の業者だが、一九〇九年に六回で三六円、一〇年に六回で三六円、一年は逝去直前の九月まで六回で四二円、合計一四円を返済している。このことは安部磯雄と岸本能武太には知らせていなかったかもしれない。

(5) 村井知至(一八六一―一九四四)は牧師を経て東京外国語学校教授。その後社会主義者へ。増野の入院費用援助呼びかけ人となり、葬儀では香典帳の会計責任者をした。

(6) 牧野虎次(一八七一―一九六四)は当時四条教会牧師。新島襄の葬儀に際して、増野は葬儀後の「故新島襄先生記念演説会」で司会を務め、牧野は葬儀の受付係だった。牧師をやめてからは社会事業に関わりつつ、後に同志社総長となった。

(7) 小山正武(一八四九―一九二四)は元大蔵省主税官。成民会機関誌『成民』第一巻第五号(一九〇八年二月一日)に「反省の要決」を寄稿している。

(8) 留岡幸助(一八六四―一九三三)は東京、北海道に家庭学校を創立した社会事業の先駆者。増野とは同志社英学校の学友で、空知集治監教師時代の日記には米国修学中の増野からの来状(『留岡幸助日記』第一巻、一八九二年三月二八日)や帰国後の「愛友増野悦興」へ書翰を認めた(同一八九三年一月二四日)など記載がある。この時期には頻繁な交流はないが、増野は孔子教会にも参加し、留岡は二宮尊徳翁五〇年記念会で遺

品説明をするなどしていた(『増野悦興研究』三八一頁)。

(9) 岸本能武太(一八六六—一九二八)は宗教学者で、高等師範学校教授から後に早稲田大学教授。前年安部磯雄と共に増野の財政(負債)整理に奔走し、増野没後には増野を追悼して「講演 増野悦興君を弔す」(『丁西倫理会倫理講演集』第一二輯、一九一一年二月一〇日)を行った。

(10) 体調もあり、丁西倫理会の例会のみが外部の研究会への出席となった。

- 五月一日 晴 午前飯田町教会ニ至ル 姉崎⁽¹⁾へ出状(書籍共)
- 五月二日 曇 姉崎、安部、長谷川ヨリ来状 安部へ葉書、長谷川へ冊子出す
- 五月三日 曇 涼 腸加答児⁽²⁾ノ気味アリ
- 五月四日 晴 三宅龍太郎ヨリ来状
- 五月五日 曇 ロブデル、前本へ出状
- 五月六日 晴 大掃除 断髪
- 五月七日 曇 駒込(四)へ出状 前本、駒込、水平、成功社ヨリ来状 訪グリフィン夫人⁽³⁾
- 五月八日 晴 前本、水平へ出状 前本ヨリ来状
- 五月九日 曇 伊藤へ出状
- 五月十日 晴 ロブデル、常盤ヨリ来状 佐藤、タイムス(六)、成功社へ出状 至第百銀行
- 五月十一日 雨 伊藤ヨリ来状 ロブデルへ出状
- 五月十二日 晴 八十度⁽⁴⁾ 訪山本、蘆川 駒込、波多野へ出状 岡田恒輔来訪
- 五月十三日 曇 至飯田町本部

五月十四日 雨 約束夕惟一館⁽⁵⁾ 甲藤ヨリ来状 甲藤へ出状 訪堀江 夕パーカー記念会⁽⁶⁾ニ惟一館ニ会ス
 五月十五日 晴 夕至教会
 五月十六日 雨
 五月十七日 晴 訪阪上、アズバン 波多野ヨリ来状
 五月十八日 晴 波多野、ケールンへ出状 阪上、浜田来訪 訪大熊
 五月十九日 晴 至小石川区役所、神田区役所 訪大熊、阪上 前本、駒込へ出状
 五月二十日 晴 長野、常盤へ出状 ケールン、前本、常盤、阪本訪ヨリ来状 訪前本、ケールン、アズバン
 五月二十一日 雨 アズバン、常盤へ出状
 五月二十二日 曇 惟一館ニ安部⁽⁷⁾ヲ訪フ 安部へ小包出ス
 五月二十三日 晴 ロプデル、藤原、宮田、水平へ出状 波多野、同志社校友会ヨリ来状
 五月二十四日 晴 至内務省、教文館 奨学会ヨリ来状
 五月二十五日 晴 約束夕飯田町傍聴 飯田町祈祷会ニテ感話ヲナス 愛離ノ理想⁽⁸⁾ 藤原、長野ヨリ来状
 五月二十六日 晴 夕方雷雨 安部(書留)へ出状
 五月二十七日 晴 伊藤へ出状 佐藤来訪
 五月二十八日 曇 約束午後奨学会 訪ケールン宅 菁々塾開舎式ニ列ス 長野へ出状 成功社、アズバンヨリ来状 平岡「」秋山方ニ至リ一泊ス

五月二十九日 雨 約束 丁酉会講演 午前ブラックマーホーム花ノ日曜日二列席ス 午后丁酉会ニ出席講

演ヲナス 国民道德ニ関スル疑問予 人道ト国民道德 吉田熊次⁽¹⁰⁾ 水平、浦口、秋山ヨ

リ来状

五月三十日 晴 老僕去リ老婢来ル 訪葛岡 村井へ出状 駒込へ出状(四、)

五月三十一日 晴 至北文館、山崎活版所⁽¹¹⁾ ケールンへ出状 蘆川ヨリ来状

(1) 姉崎正治(一八七三〜一九四九)は宗教学者で、東京帝国大学教授。岸本能武太とともに比較宗教学会を設立した。増野との関係はよくわからないが、岸本を介してか、あるいは丁酉倫理会の研究会からであろう。

(2) 陽加答児⁽¹²⁾の記載は初めてである。前年一月二十一日に「夜来下痢、教会を休む」とあり、半年ぶりの腹痛である。

(3) グリフィン夫人については、現時点では不詳である。

(4) 八十度は体温ではなく、気温だと思われる。華氏だとすると、摂氏二十九度。七月三十一日には九十度とある。華氏九十度は摂氏三三度。

(5) 惟一館⁽¹³⁾はユニテリアン教会の本拠として、コンドルが設計し、米国ユニテリアン教会により一八九四年に三田の薩摩屋敷跡に建設された。

(6) セオドア・パーカー(Theodore W. Parker; 一八一〇〜一八六〇)は奴隷制廃止主義者のユニテリアン。

(7) 安部磯雄は一八九八年に村井知至とともに惟一館で社会主義研究会を設立した。一九〇二年二月からは日本ユニテリアン教会の会長を務め(松田義男編『安部磯雄年譜・著作目録』一四五頁、二〇二二年五月一八日改訂)、岸本能武太が補佐した。佐治実然も研究会に参加していたが、増野は社会主義には距離を置いていた。

(8) 「愛離ノ理想」については遺された説教草稿などからは確認できない(『増野悦興研究』四二〇〜四二五頁)。

(9) 「国民道德ニ関スル疑問」は一二月一〇日発行の『丁酉倫理会 倫理講演集』第九九輯に雷軒生の名で収録されている。ここで語られた増野の「平岡明子」観については、イブセン流行の世相も含めて検討した(『増野

悦興研究』四〇六―四〇九頁）。二年前には「現社会の悪風潮」(『成民』第一卷第一号、一九〇八年三月一日、のち『筆華舌英』に収載)で、現社会の悪風潮は愛国の名で偏狭の思想を鼓吹し、自然の名で道德の尊厳を侵し、科学の名で信仰の神聖を毀すことであり、真の道德は自由の空気のなかで成長し、道德を伴って健全な発達をする、と記している(『増野悦興研究』四七七頁)。

(10) 吉田熊次(一八七四―一九六四)は教育学者で、東京高等師範学校教授。のち東京帝国大学教授。
(11) 山崎活版所は『成民』の印刷所で、山崎鉄太郎が経営していた。

六月一日 晴 約束夕飯田町講義 安部、ケールンヨリ来状 安部、水平へ出状 夕飯田町ニ至り聖

書講義ヲナス 訪蘆川

六月二日 雨 アズバンへ出状

六月三日 曇 断髪 訪蘆川 蘆川、葛岡、ケールンヨリ来状

六月四日 曇 ケールンへ出状 至小久保、北文館 不在中物集来訪

六月五日 雨 約束午前説教 午前飯田町ニテ説教ス 基督ノ基督教⁽²⁾

六月六日 晴 ケールン、アズバンへ出状

六月七日 晴 約束午前物集来訪 訪蘆川 物集来訪

六月八日 晴 約束夕飯田町講義 ケールンヨリ来状 至北文館 夕飯田町ニ至り講義ヲナス

六月九日 晴 安部、ケールンへ出状

六月十日 雨 安部ヨリ来状 安部、アズバン、駒込(五)へ出状 訪アズバン 村田〔勤〕⁽³⁾来訪

六月十一日 晴 波多野へ出状 佐藤へ出状

- 六月十二日 晴
六月十三日 晴 安部へ出状 ケールンヨリ来状 甲賀藤子来訪 至北文館 夜葛岡来訪 家族会幹事ヨリ来状
六月十四日 雨 家族会幹事、葛岡、博文館へ出状 宮田、アズバンヨリ来状
六月十五日 雨 約束夕飯田町講義 藤原、安部ヨリ来状 夕飯田町ニ至リテ講義ヲナス 告森へ出状
六月十六日 雨 安部、ケールンヨリ来状 安部へ出状 博文館へ校正済原稿ヲ送ル
六月十七日 曇 至第百銀行、山本方
六月十八日 曇 訪蘆川
六月十九日 曇 アズバンヨリ菓肴ヲ送ル
六月二十日 晴 駒込(三)、ロプデルへ出状 安部、丁酉幹事ヨリ来状 至北文館
六月二十一日 曇 訪アズバン
六月二十二日 雨 藤原、阪本へ出状 佐藤来訪
六月二十三日 曇 宮田(六、五)、タイムス(六)へ出状 至小久保医院 亀井家(出産通知)ヨリ来状
六月二十四日 晴 中島徳藏、石川安次郎、津和野社ヨリ来状 中島へ出状
六月二十五日 晴 訪ハーサウエイ⁽⁴⁾ ケールンへ原稿、佐藤へはがき出ス
六月二十六日 雨 亀井家へ出状
六月二十七日 曇 「増野」自助ヨリ来状⁽⁵⁾
六月二十八日 雨 地震 佐藤へ出状 津和野社、北文館、坂本ヨリ出状^(マ) 佐藤来訪

六月二十九日 晴 坂本、駒込(二三)、安部(書留)へ出状

六月三十日 曇 安部宅ヨリ来状 佐藤へ出状 訪蘆川、ハサウエイ(暇乞)

(1) 飯田町教会での聖書講義などの草稿は『明治四十二年秋以降飯田町祈祷会』(キリスト教同仁社団図書室(資料室)蔵)、『聖書講義「年欠」草稿(木村滋子蔵増野悦興文書「仮目録」N-1)』の二冊が確認されている。

(2) 「基督ノ基督教」とは「マタイによる福音書」第七章27・28。「雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである」、「イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えにひどく驚いた」とある(日本聖書協会『新約聖書』一九五四年改訳、一〇頁。以下、『新約聖書』)。「明治四十二年秋以降飯田町祈祷会」の「基督ノ基督教」には、「基督自身ハ学者ノ如クナラズ權威有テル者ノ如ク語りタリト見ユ―權威ハ実験ノ結果ノミ、果然彼ハ論理ノ人ニアラズシテ実験ノ人ナリキ」と記されている。「実験」とは増野の信仰の核心である「信仰的実験」を指す(『増野悦興研究』二八〇～二八一頁)。

(3) 村田勤(一八六六―一九二二)は牧師、翻訳家。増野の逝去後はケールンの著作の翻訳を引き受けた。

(4) ハーサウエイ(Hathaway, M. Agnes, 一八六三―一九三九)はイリノイ州シカゴのロンバード大学の数学教員で学生部長であったが、一九〇三年年秋に布教資格の学位を取り、一九〇五年五月に宣教師として来日した(『The Larger Hope』p.440)。静岡同仁教会での伝道活動の後、翌年末からブラックマーホームの監督として少女たちの養育にあたり、一九三九年三月一三日に逝去した。増野との関係は解題で触れる。

(5) 増野自助は異母弟で、父親増野貞吉一家の生活を支えていた。

七月一日 曇 佐藤、長野、藤原ヨリ来状 至北文館、飯田町教会、小久保医院(次日二入ル)

七月二日 曇

七月三日 曇 訪松浦、奨学会ヨリ来状

- 七月四日 雨 奨学会へ出状 訪アズバン
- 七月五日 晴 家翁来訪 岡田恒輔ヨリ来状
- 七月六日 曇 長野へ出状
- 七月七日 雨 訪村田宅
- 七月八日 曇 ケールン来訪 中島、丁酉会ヨリ来状 中島へ出状
- 七月九日 雨 亀井家ヨリ植木来訪 駒込(三)、佐藤へ出状
- 七月十日 雨
- 七月十一日 雨 至小久保医院
- 七月十二日 雨
- 七月十三日 晴 夜雨 水平ヨリ来状 水平、北文館へ出状 乙女⁽²⁾来訪
- 七月十四日 晴 夜雨 同窓会幹事、平野、大熊ヨリ来状 同窓会幹事へ出状 岡田恒輔来訪
- 七月十五日 雨 蘆川ヲ訪フ
- 七月十六日 曇 夜雨 断髪
- 七月十七日 晴 午前教会ニ至ル ロプデルヨリ来状
- 七月十八日 晴 至第百銀行、山本方
- 七月十九日 曇
- 七月二十日 晴 駒込へ出状 至小久保、教会
- 七月二十一日 晴 日中九十度 ロプデル、宮田へ出状

七月二十二日 晴

七月二十三日 晴 浦口来訪 ハーサウエイヨリ来状

七月二十四日 晴 夕雨 タイムス、自助ヨリ来状 訪山川医士、坂上 至教会

七月二十五日 雨

七月二十六日 雨 訪松浦、山川、村田 松尾ヨリ小包来ル

七月二十七日 晴 津和野社、アズバン、久保ヨリ来状 津和野社、岡田正男へ出状

七月二十八日 晴 安部へ書留出ス 至小久保医院 岡田正男ヨリ来状

七月二十九日 曇 訪甲賀

七月三十日 晴 予約 午后津和野社 安部宅、安都間ヨリ来状 アズバンへ出状 午后津和野社宴会ニ

出席ス⁽³⁾

七月三十一日 晴 九十度 アズバン、岡田へ出状 水平、福田フメヨリ来状

(1) 夏の暑さもあり、七月は日記に記載なしの日が六日間ある。小久保医院にも二日間通院している。

(2) 乙女については、現時点では不詳である。七月三日・九月五日・一〇月八日・同二〇日・十一月一日・同一九日・一二月一五日と半年に七回来訪している。秋の彼岸には「お萩」を作らせ、一月には膝掛け布団を作っている。あるいは二人の異母妹のうちの一人かもしれないが、推測の域を出ない。「増野悦興・サク系図」は『増野悦興研究』六八頁にある。

(3) 体調が回復したのか、珍しく津和野社の宴会に出ている。

八月一日 晴 午后驟雨 約束 都屋 訪都屋、飯田町教会

- 八月二日 雨 アズバンヨリ来状
- 八月三日 曇 至教文館
- 八月四日 晴 西尾幸太郎ヨリ来状
- 八月五日 曇 至小久保
- 八月六日 曇 西尾、浦口、ロプデルへ出状
- 八月七日 晴 夜雨 飯田町教会ニ至リ祈祷会ヲ司ル 「故沖津紀念」⁽¹⁾ (十四人) 浦口ヨリ来状 訪
「ホーム」
- 八月八日 雨 岡田、北文館へ出状
- 八月九日 雨 教文館ヨリ原稿、ロプデルヨリ手紙來ル 教文館へ原稿出ス
- 八月十日 雨 至神田橋稅務署、第百銀行
- 八月十一日 晴 出水 教文館へ校正原稿ヲ送ル
- 八月十二日 晴 至小久保、山本
- 八月十三日 雨 タイムス、東亜協会へ送金ス
- 八月十四日 雨 午前教会に至リ祈祷会ヲ司ル 「七度ヲ七十倍セヨ」⁽²⁾ (十二人) ケールンへ出状 断髮
- 八月十五日 晴 ケールンヨリ来状 田中文勝結婚通知状來ル
- 八月十六日 雨 ケールンへ出状
- 八月十七日 曇 岡田正男ヨリ来状
- 八月十八日 曇 至小久保 ケールンヨリ来状

八月十九日 曇 教文館、駒込へ出状 アズバンヨリ来状

八月二十日 雨 岡田正男、山崎へ出状 タイムス、坂本直三郎ヨリ来状 教文館ヨリ納本⁽³⁾来状

八月二十一日 晴 内務省へ「活宗教ノ要素」⁽⁴⁾出版届出ス 宮田ヨリ来状 松尾来訪

八月二十二日 晴 訪佐治、堀江 平野ヨリ来状

八月二十三日 晴

八月二十四日 晴 アズバン、久保潤次郎ヨリ来状 訪ケールン⁽⁵⁾ アズバン、中山和助へ出状、岡田へ出状

八月二十五日 晴 坂本龍之輔、宮田(一)、安部へ出状 小久保来訪

八月二十六日 晴

八月二十七日 晴 小久保来訪、浣腸ヲナス 中山、坂本龍、岡田恒ヨリ来状 安部留守宅へ出状

八月二十八日 晴 祈祷会司式 赤子の心情ノ必要⁽⁷⁾

八月二十九日 晴 岡田正、岡田恒、平野、安部間へ出状 安部宅ヨリ来状 韓国併合発表セラル⁽⁸⁾

八月三十日 晴 夜豪雨 アズバン帰京 至小久保

八月三十一日 晴 佐藤潔へ出状 訪アズバン 佐藤ヨリ来状

(1)「故沖津紀念」とは前年八月十二日に亡くなった教会員沖津の回顧である。当時増野は死去の知らせで自宅を訪ね、翌日の葬儀を行った。十五日には祈祷会で「沖津二閔スル所感」を述べた。草稿には「○馬太 十八 20 沖津兄弟二就キテノ感想 数日前マデノ彼ト今日ノ彼(吾人ニ一歩先ンジタル経験)、彼トシテハ損ナシ吾人トシテハ損ナリ、真面目ノ性質ト庶幾スベキ造詣 吾人ノ損ヲ償フノ語適用、吾人ノ覚悟(桂ト川上)」(明治四十二年秋以降「飯田町祈祷会」草稿)とある。「マタイによる福音書」第十八章20は、「ふたりまたは三人が、私の名によって集まっている所には、私もその中にあるのである」とある(『新約聖書』二一九頁)。

(2) 「七度ヲ七十倍セヨ」(明治四十二年秋以降 飯田町祈祷会)とは「マタイによる福音書」第十八章21・22。「その時、ペテロがイエスのもとにきて言った、「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか」。イエスは彼に言われた、「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい」とある(『新約聖書』二九頁)。「明治四十二年秋以降 飯田町祈祷会」草稿には記載がない。

(3) 納本はケールン著『活宗教の要素』と考えられる。

(4) この時点でのケールンの著作は、この年三月刊行の『日本将来の宗教』のほかには布教用の小冊子『進歩的基督教と日本近代の思想』、『夢想と実生活 勝利の生涯』があり、『活宗教の要素』は小冊子の三冊目で、すべて増野が印刷所との交渉・入稿・校正などの段取りをしている。

(5) 『活宗教の要素』を届けたと思われる。

(6) 洗腸も初めてで、消化器系の体調も思わしくなくなってきた。

(7) 「赤子の心情ノ必要」は二月二七日の教会礼拝での説教「真理ト自由」と同様の内容だったと考えられる。

(8) 時事問題を書いているのは珍しく、前年一月四日の「伊藤公国葬」とこの日の「韓国併合」のみである。韓国併合については「病牀回顧」で「帝国民に取り発奮の動力」(『丁酉倫理会 倫理講演集』第九八輯、一九一〇年一〇月一〇日)とした。増野のアキレス腱である。詳細は『増野悦興研究』第八章第四節・第九章第三節に記した。

九月一日	晴	老婢ヨシヲ開雇ス	小沢慶三郎来訪	佐藤潔へ出状
九月二日	晴	二百十日	岡田正男へ出状	
九月三日	晴			
九月四日	晴	山崎忠次郎、	和田弘基へ出状	

- 九月五日 晴 山崎ノ小使来リ終日掃除片附等ヲナス 乙女来訪 安都間、安部ヨリ来状 ロブデル、岡田正男へ出状
- 九月六日 晴 風 アズバンへ出状 疲労終日休息^①
- 九月七日 雨 松尾へ葉書及小包送ル
- 九月八日 雨 約束 午前安部訪問 訪安部 「増野」公平来訪^②
- 九月九日 雨 岡田正男ヨリ来状 岡田、安部、木山へ出状 岡田(再)、タイムス、村上勝蔵、駒込(二)、へ出状 訪小久保、アズバン、松浦 岡田ヨリ来状
- 九月十日 雨 岡田、安部へ出状 公平来ル 斎藤来訪 木山ヨリ雑誌送ル
- 九月十一日 晴 約束 向一ヶ年間休養^③ 安部ヨリ来状 午前教会ニ至ル 福田フメヨリ来状
- 九月十二日 晴 夜雨 松尾ヨリ来状 「開拓者」^④へ原稿出ス 松尾、大工へ出状
- 九月十三日 雨 タイムスヨリ来状 岡田哲蔵、安部へ出状 ケールン、ロブデル来訪
- 九月十四日 雨 至事務所、第百銀行 安部、宮田(五、五)、ロブデルへ出状
- 九月十五日 雨 中島(原稿)、早稲田出版部へ出状 岡田哲蔵、平野ヨリ来状 中島ヨリ来状
- 九月十六日 雨 夜雨 約束 銀行、保険会社 断髪(角刈ニ改ム) 岡田哲蔵、中島徳蔵へ出状 松浦来訪
- 九月十七日 雨 夕晴 安部(書留)へ出状 岡田恒輔来訪 畳入換ヲナス 訪河原
- 九月十八日 晴 松浦二代リ「ホーム」日曜学校ヲ教ユ 夕自助来訪 妹尾ヨリ来状
- 九月十九日 晴 約束 午后三時アズバン 大工来ル 訪アズバン、松浦 ケールン来訪 駒込(六)、太

田へ出状 乙女、丁酉会ヨリ来状 中島、浦口ヨリ来状

九月二十日 雨 中島、飯田町小使、福音新報社へ出状

九月二十一日 晴 早稲田出版部へ出状 孔子教会、安部ヨリ来状

九月二十二日 曇 中島(原稿)へ出状

九月二十三日 晴 ケールン来訪 至阪上宅、山崎活版所 安部ヨリ来状

九月二十四日 晴 今日以后外出セズ、タイムス、ロブデル、安部、坂上、小久保へ出状

九月二十五日 晴 約束丁酉会 小久保来診、当分安靜ヲ命令ゼラル⁽⁵⁾

九月二十六日 雨

九月二十七日 雨 奨学会、坂上、小久保ヨリ来状 山崎へ出状

九月二十八日 雨 坂上へ公平ヲ遣ハス 小久保来診

九月二十九日 雨 三並「良」、北文館へ出状 山崎忠次郎来訪

九月三十日 晴 ケールン来訪 タイムス社ヨリ来状

(1) 「疲労終日休息」と記すほど、秋口になり体力が衰えている。

(2) 増野公平は増野自助の弟。病床の増野の世話をするようになる。

(3) 「向一ヶ年間休養」を小久保医師から命じられた。「病牀回顧」(『丁酉倫理会倫理講演集』第九八輯)には、「主治医より暫時休養の已むを得ざる旨を告げらるゝに至つた、曰く「向ふ一ヶ年間思ひ切つて養生する事に極めよ」とある(『増野悦興研究』四三八〜四三九頁)。

(4) 『開拓者』の原稿については未確認である。

(5) 「今日以后外出セズ」は小久保医師の指示。

(6) 「当分安静ヲ命令セラル」も小久保医師の指示で、肺患の進行が厳しくなった。
(7) 三並良(一八六五～一九四〇)はドイツ哲学者。ユニテリアンの牧師となり、ユニテリアン協会会長に。増野との関係は現時点ではよくわからない。

- 十月一日 雨 自由堂へ出状 栗原勝次ヨリ来状 山崎鉄太郎来訪
十月二日 晴 安部へ出状
十月三日 雨 約束 撰²挙資格証明 ケールンへ出状 桜井来訪
十月四日 晴 約束 同届 公平ヲ小石川区役所ニ遣ス¹ ケールン、小久保来訪 自由堂、松尾へ出状
安部ヨリ来状 安部へ出状
十月五日 晴 津和野社ヨリ来状
十月六日 晴 三並、栗原へ出状 新社会劇発起人ヨリ来状
十月七日 晴 松尾、三並ヨリ来状 小久保へ出状
十月八日 曇 He that believeth shall not make haste. ISA.28:16. ⁽¹⁾岡田 [、] 逸見へ出状 安部ヨリ手紙(原稿)来ル 乙女来訪
十月九日 曇 中島へ原稿、ケールンへ松尾原稿、安部、三並へ手紙、タイムスへ月賦金(6) 出ス
小久保へ「高貴ナル人格」ヲ贈ル⁽²⁾
十月十日 雨 西村へ手紙(原稿)、安部、教文館へ出状 小久保来診
十月十一日 雨 グリーン⁽³⁾、ケールンへ出状 タイムス、横浜火災支店ヨリ来状
十月十二日 雨 ケールン来訪 国民新聞へ原稿送ル⁽³⁾ 水平、三並ヨリ来状 川越中学校第一期卒業生鳥

越ヲ総代トシテ見舞ヲ贈ル⁽⁵⁾

- 十月十三日 雨 川上常郎、岡田恒輔、牛込紙屋へ出状 望月来訪
- 十月十四日 晴 小久保来診 松浦来訪 ハーサウエイ、河内堂ヨリ来状 ハーサウエイ、河内堂へ出状
- 十月十五日 雨 中島徳蔵へ出状(原稿) 岡田、新ヨリ来状
- 十月十六日 雨 中島、ロブデル、蘆川ヨリ来状 ケールンへ出状 青年婦人矯風会ヨリ花ヲ贈ル⁽⁶⁾
- 十月十七日 雨 万朝報者、新、坂本直、ロブデルへ出状 岡田恒輔来訪⁽⁷⁾
- 十月十八日 晴 約束 保険会社 山崎忠、三並へ出状 松尾へ原稿出ス 坂本直、丁酉幹事ヨリ手紙、
教文館ヨリ原稿来ル ケールン、大熊来訪 教文館へ校正返ス
- 十月十九日 晴 駒込へ出状 小久保来診 岸本、椅子屋来訪
- 十月二十日 晴 乙女来ル、お萩ヲ作ラシム、波多野、丸善へ出状 宮田ヨリ来状
- 十月二十一日 雨 横浜火災ヨリ来状 岡田恒輔ヨリ来状
- 十月二十二日 曇 鈴木醇、岡田、久保、藤原、加藤道士へ出状 松尾ヨリ原稿来ル 教文館へ原稿出ス
- 十月二十三日 晴 坂上へ公平ヲ遣ス 山崎鉄太郎来訪
- 十月二十四日 晴 鈴木醇、救世軍ヨリ来状 熊田、若林へ出状
- 十月二十五日 雨 安部、宮田、山崎忠、岡田へ出状 藤原ヨリ来状
- 十月二十六日 曇 宮田、安部宅、孔子教会、同志社校友会、岡田恒ヨリ来状 神田郵便局へ出状
- 十月二十七日 晴 辻本、大熊へ出状 宮田、三宅、若林ヨリ来状 山崎小使来訪
- 十月二十八日 晴 岸辺へ原稿出ス 弘道館ヨリ来状 小久保、葛岡来訪

十月二十九日 雨 宮田、駒込、山崎鉄、ケールンへ出状 宮内、岡田恒ヨリ来状 鈴木醇来訪

十月三十日 曇 大掃除 平野ヨリ来状

十月三十一日 晴 平野へ出状（一枚摺共） ケールン来訪

(1) 『SA&I6』とは「イザヤ書」第二十八章16。「それゆえ、主なる神はこう言われる。「見よ、わたしはシオンに一つの石をすえて基とした。これは試みを経た石、堅くすえた尊い隅の石である。』信ずる者はあわてることはない。』17（略）」とある（日本聖書協会『旧約聖書』一九五四年改訳、九七八頁）。

(2) 小久保とは八月〜一月にかけて五回ずつ行き来している。小久保医師とは別人と思われるが、人物は不詳。親しくなり、贈呈したと思われる。

(3) グリーン (Daniel Crosby Greene, 一八四三〜一九一三) はシカゴ神学校からアンドーバー神学校に学び、アメリカ外国伝道委員会から派遣され、一八六九年に来日した。八二年から八七年まで同志社英学校で教えたが、その間、八六年三月に卒業目前の増野ほか八名の五年生が教育方針をめぐって衝突し退学した。それから四半世紀である。増野は何を書き送ったのか。返信はない。アズバンの日記によると、この年四月二日にはミセス・グリーンの葬儀が行われている（『夢が実を結ぶまで』一五八〜一五九頁）。翌年に増野が、その翌々年にはグリーンも他界する。

(4) 『国民新聞』への原稿については検索したが、新聞記事は見当たらなかった。

(5) 「鳥越ヲ総代トシテ見舞」の総代は鳥越錦三、卒業生は三〇名（埼玉県立川越高校同窓会『会員名簿』第二〇号、二〇一九年）である。この見舞については一回生の岡田恒輔や安部立郎も言及していない（『筆華舌英』）。増野も他のところでも記しておらず、人数なども不明である。

(6) 婦人矯風会との関係は、一八九三年二月二日に遡る。当時米国から帰国直後だった増野は女子学院で開催された同会の年会後に演説を依頼されている（『広告 本年の年会 東京婦人矯風会第六回年会議事』『婦人矯風雑誌』第三号、一八九四年一月二日）。これは妻竹代が役員だった竹越与三郎が仲介したと考えられる。この時の演説の「主意」は「改革の大本領」という内容で、矯風会員は「先ず家庭の一分子」となって、キリス

トの犠牲に習い「真の改良家」になつてほしいと語っている。増野にしては珍しく民党と政府党との「政事上の事」に言及したうえで、改革者の心構えを述べて、「余は岡山孤児院の報告を読み最も感ずるは、困難に遇ひて、その主義を変ぜず、固く之を信ずる事なり。我等が改革を為すには、又この精神を要す。是れ即ち順教者の精神なり」と呼びかけている(「改革の大本領」「婦人矯風雜誌」第三号附録)。なお、増野は矢島樽子とも家族ぐるみの交流があつた。「青年婦人部」との関係は不明である。

(7) 岡田の回想では、「四十三年の秋某日自分は先生を雑司ヶ谷の寓居に訪ねた。小春の日であつた」先生は「必ず全快して六十歳まで働き度い」と言つておられた。恢復後は保養に「知己門弟を訪ねつゝ、入間、比企、秩父の田舎を巡つて見度い」と語られた(「増野悦興先生伝」『筆華舌英』)という。

十一月一日 晴 約束 都屋 神田郵便局、大西追悼会発起人、蘆川ヨリ来状 鈴木晋一、警保局図書課

へ出状 長野へ出状

十一月二日 曇 鈴木晋一、青年矯風会員来訪⁽¹⁾ 大西追悼会へ出状

十一月三日 雨 望月松太郎、小久保来訪

十一月四日 晴 宮田へ出状 中島徳蔵ヨリ来状

十一月五日 晴 約束 基教徒ナルノ道冊子日附⁽²⁾ 乙女来り膝掛布団ヲ作ル 中島、安部へ出状 中島、

宮田ヨリ来状

十一月六日 晴 大工へ出状

十一月七日 晴 タイムスへ出状

十一月八日 晴 大工、小久保、家主来訪 山崎鉄へ出状 長野ヨリ来状

十一月九日 晴 紀平「正美」⁽³⁾ 来訪 岡田正男、小石川区役所(公平寄留届)⁽⁴⁾ へ出状

十一月十日 雨 鈴木醇、岡田恒ヨリ来状
 十一月十一日 晴 丁酉幹事、宮川保全ヨリ来状 宮川保全へ出状
 十一月十二日 晴 河内堂ヨリ校正来ル 岡田哲蔵、タイムスヨリ来状
 十一月十三日 晴 岡田哲蔵へ出状
 十一月十四日 曇 大工来リ押入ヲ造ル 中島(原稿)へ出状
 十一月十五日 晴 小久保来診
 十一月十六日 曇 ロブデル、鳥越ヨリ来状
 十一月十七日 晴 鳥越へ出状
 十一月十八日 晴 始メテ結氷ス 鈴木醇、丁酉幹事ヨリ来状 駒込(五)、早稲田大学へ出状 山崎忠、岡田正男来訪
 十一月十九日 晴 乙女来訪
 十一月二十日 晴 家族会幹事へ出状
 十一月二十一日 晴 甲藤ヨリ来状 岡田恒輔来訪
 十一月二十二日 晴 ロブデルへ出状 岡田正男、落合兼広ヨリ来状
 十一月二十三日 曇 小久保来診 鈴木醇、山崎ハツ、小山正武ヨリ来状 小山、落合へ出状
 十一月二十四日 晴 山岡ヨリ来状
 十一月二十五日 晴 竹越ヨリ来状 坂上へ出状
 十一月二十六日 晴 山崎忠次郎来訪

十一月二十七日 晴 鈴木醇、平野、坂上ヨリ来状

十一月二十八日 晴 坂本直三郎ヨリ来状 坂本、安部、駒込へ出状

十一月二十九日 晴 小久保来診 逸見ヨリ来状

十一月三十日 雨 初雪

(1) 青年矯風会員と青年婦人風会員との違いは分からない。来訪はブラックマホームの少女たちが禁酒会の活動に積極的に参加していたことも関係しているよう。

(2) 『基教徒ナルノ道』はケールンの小冊子第四集である。

(3) 紀平正美(一八七四—一九四九)は哲学者。國學院大學講師。『成民』第三卷第一号(通卷第一二号、一九〇八年九月一八日)に「病中の回想」を寄稿している。

(4) 寄留届をして増野公平が同居し、看護にあたった。

(5) 岡田の回想に「四十三年秋になつてからは病魔に仰臥したま、弟君に口授して原稿を筆記せしめられた。身体の機能が衰へる反対に精神の機能が敏活となり諸種の問題に就て会心の思想が油然として湧き出づるを覚え」と語られた事があつた(『増野悦興先生伝』『筆華舌英』)とある。

(6) 岡田は翌一一年一月から一年志願兵として宇都宮連隊に入營した。いとまごい上がった際に、「容態にも似ず輝くお顔と元氣克い声で、平常は各其職務に励み、一朝事あるの日は剣を執りて国家の為に尽す是れ男児の本懐である」、「今や日米の關係急で国家の将来は益々多事であらう」、「充分に軍事を研究し国家危急の場合には剣を揮つて自分の分まで国家に尽して呉れと励まされた」(『増野悦興先生伝』『筆華舌英』)という。これが最後の別れとなつた。

十二月一日 晴 中島徳蔵へ出状

十二月二日 曇 竹中、高田ヨリ来状 安部、蘆川へ出状 松浦来訪

- 十二月三日 曇 蘆川ヨリ来状
- 十二月四日 晴 安部ヨリ来状
- 十二月五日 晴 小久保来診 蘆川、中島徳蔵ヨリ来状
- 十二月六日 晴 坂本、丁酉幹事、浦口ヨリ来状
- 十二月七日 晴 津和野社幹事、岸本、広津、岡田恒ヨリ来状 岡田、岸本へ出状 山崎忠へ出状 〔
- 小沢ヨリ来状
- 十二月八日 曇 大熊来訪 小沢へ小包出ス 博文館ヨリ来状 駒込へ出状
- 十二月九日 晴 安部、山崎忠来訪 博文館へ出状
- 十二月十日 曇 氷点 河内堂、アズバン(二、五)へ出状 ケールンヨリ来状 タイムスへ送金
- 十二月十一日 晴 ケールンへ出状
- 十二月十二日 晴 寒 ケールン、中島、児童研究会ヨリ来状 ロブデル、中島、山室(小包)へ出状
- 十二月十三日 晴 断髪 村井美子来訪⁽¹⁾ タイムスヨリ来状
- 十二月十四日 晴 平野へ小包出ス
- 十二月十五日 晴 ハーサウエイ、山室、田宮、水平ヨリ来状 乙女来訪
- 十二月十六日 晴 タイムス、ロブデルヨリ来状
- 十二月十七日 晴 初雪 ケールン、山崎へ出状
- 十二月十八日 晴 安部へ出状
- 十二月十九日 晴 駒込、ロブデルへ出状 平野ヨリ来状 ケールン来訪

十二月二十日 曇 ロブデル、駒込ヨリ来状

十二月二十一日 曇 坂上、ケールン、岡田へ出状 南湖院⁽²⁾ヨリ来状

十二月二十二日 晴 南湖院、逸見、谷へ出状 ケールン、安部、蘆川ヨリ来状 小久保来診

十二月二十三日 晴 教会会計、中島徳、ロブデルヨリ来状

十二月二十四日 晴 中島、ケールンへ出状

十二月二十五日 晴 三笠、松居来訪

十二月二十六日 晴 安部へ出状

十二月二十七日 晴 小久保来診、植木来訪 アズバンへ出状

十二月二十八日 晴

十二月二十九日 晴 ケールン、平野へ出状

十二月三十日 晴 三並ヨリ来状

十二月三十一日 雪 蘆川、大熊ヨリ来状 小久保来診⁽³⁾

(1) 村井美子は村井知至の妻。夫の伝言での訪問であろう。

(2) 南湖院は同志社英学校の学友高田畠安が院長をしていた東洋内科医院の療養施設で、茅ヶ崎の海浜にあったが、増野には転地療養がかなわなかった。

(3) 小久保医院には七月に三回通院している。小久保医師の来診は九月二回・一〇月三回・十一月三回・十二月が四回、四カ月で二二回に及んでいる。翌一九一一年五月一七日には高田病院(東洋内科医院)に入院となる。

金銭支出簿

月日	摘要	円銭厘
1. 4.	電車切符	0.850
6.	租税	5.350
9.	駒込へ	3.000
14.	ランプ	.480
17.	電車切符	.850
17.	弁当屋	1.140
19.	日本生命	2.800
19.	駒込へ	4.000
19.	東京教会	.250
20.	点灯料	.360
22.	同志社校友会	1.000
24.	租税	6.330
24.	電車切符	0.850
29.	家賃	9.000
29.	北文館	.850
29.	三河屋	3.840
29.	米屋	4.000
29.	下男へ	3.640
30.	弁当屋	.900
30.	事務所	1.100
30.	筆工料	1.600
30.	駒込へ	5.000
31.	新聞	.250
31.	車屋	.300
	[計]	57.740]
2. 2.	都屋	4.500
3.	駒込へ	3.000
4.	教材	2.000
10.	駒込へ	3.500
13.	平岡へ	5.000
18.	車、灯	1.310
19.	駒込へ	5.000
19.	筆工料	1.900

23.	裕新調	2.730
26.	シャツ代	1.200
26.	駒込へ	5.000
26.	北文館	.420
26.	家賃	9.000
	[計]	44.560]
3. 5.	駒込へ先月分	1.500
9.	駒込へ	2.500
19.	駒込へ	5.000
19.	平岡へ	4.360
29.	駒込へ	3.500
29.	行李	.700
31.	信玄袋	.850
31.	家賃	9.000
	[計]	27.410]
4. 6.	駒込へ先月分	5.000
7.	租税	6.330
9.	駒込へ	3.000
13.	三河屋	4.140
14.	大工払	2.180
14.	鍬	.500
16.	東亜協会	1.000
19.	日本生命	2.800
19.	駒込へ	3.000
19.	点灯料	.360
27.	下男へ	1.400
29.	駒込へ	4.000
29.	米屋	5.000
30.	新聞	.210
30.	北文館	.390
30.	丁酉会	1.000
30.	家賃	9.000
	[計]	49.310]

5.	1.	都屋	4.500		八百屋	2.280	
	7.	駒込へ先月分	4.000		新聞	.250	
	12.	駒込へ	3.000		[計	37.060]	
	12.	波多野へ	2.850				
	18.	下男へ	.500	7.	3.	下婢へ	1.000
	19.	駒込へ	5.000		9.	津和野社	.700
	21.	下男へ	1.000		9.	駒込へ	3.000
	23.	点灯料	.360		16.	中元用	2.500
	23.	家賃	9.000		20.	駒込へ	5.000
	24.	書籍	.450		21.	点灯料	.360
	25.	弁当代	.470		24.	教会費	.300
	26.	下男へ	2.500		26.	家賃	9.000
	29.	丁酉会	1.300		27.	下婢	2.500
	30.	三河屋	5.000		27.	米屋	3.000
	30.	米屋	3.000		31.	洗濯屋	.235
	30.	駒込へ	4.000		31.	牛乳屋	1.160
	30.	北文館	.370		31.	八百屋	1.130
	30.	新聞	.250		31.	三河屋	1.280
	30.	老婢へ	.300		31.	北文館	.250
		[計	47.850]		[計	31.415]	
6.	1.	老婢へ	1.000	8.	1.	都屋	4.500
	4.	蚊帳	.850		1.	下婢へ	1.000
	6.	老婢へ	.500		2.	新聞七月分	.370
	10.	駒込へ先月分	3.000		11.	駒込へ	3.000
	10.	駒込へ	2.000		13.	東亜協会	1.000
	19.	点灯料	.360		19.	駒込へ	5.000
	20.	駒込へ	3.000		25.	点灯料	.360
	23.	鼠入ラズ	.950		28.	米屋	3.000
	26.	米屋	3.000		30.	家賃	9.000
	26.	家賃	9.000		30.	下婢	2.500
	26.	老婢へ	1.500		31.	牛乳屋	1.240
	27.	北文館	.325		31.	車屋	1.400
	28.	日本生命	2.800		31.	八百屋	.770
	29.	駒込へ	3.000		31.	三河屋	2.000
	30.	三河屋	3.245		31.	北文館	.350

	31.	新聞	.550		21.	教会費	.300
	31.	教会費	.300		22.	福音新報	1.350
		[計	36.340]		24.	米屋	3.000
9.	5.	駒込へ	1.000		27.	家賃	9.000
	9.	駒込へ	2.000		28.	堅椅子	4.000
	14.	公平へ	.500		28.	点灯料	.360
	19.	駒込へ	6.000		29.	駒込へ	5.000
	19.	材木	.920		30.	北文館	.800
	19.	点灯料	.360		31.	牛乳屋	2.480
	21.	公平月謝	.600		31.	三河屋	2.690
	21.	砥皮	.600		31.	洗濯	.240
	22.	租税	6.350		31.	新聞屋	.830
	27.	灌腸器	.360			[計	46.895]
	29.	教会費	.300	11.	1.	公平小使	.500
	29.	家賃	9.000		1.	都屋	4.500
	30.	米屋	2.000		5.	公平パッチ	.500
	30.	三河屋	2.450		5.	駒込へ	2.000
	30.	八百屋	1.440		16.	公平小使	.500
	30.	牛乳屋	1.320		18.	駒込へ	5.000
	30.	洗濯	.250		18.	公平月謝	.600
	30.	北文館	1.080		18.	教会費	.300
	30.	車屋	2.420		22.	点灯料	.360
	30.	新聞	.550		24.	米屋	3.000
		[計	39.500]		24.	火鉢	.400
					25.	租税	6.350
10.	1.	公平小使	.500		27.	大工払	5.000
		冬物洗濯	2.120		28.	駒込へ	2.000
	5.	大工払	1.300		28.	家賃	9.000
	8.	駒込へ	2.000		30.	三河屋	3.000
	13.	畳屋	1.025		30.	八百屋	3.000
	16.	公平小使	.500		30.	牛乳屋	1.960
	18.	日本生命	2.800		30.	新聞屋	.830
	19.	駒込へ	5.000		30.	北文館	1.020
	20.	公平月謝	.600		30.	車屋	.850
	20.	同志社校友会	1.000		30.	肉屋	1.060

	[計	51.730]	7.	31.415			
			8.	36.340			
12.	1.	公平小使	.500	9.	39.500		
	8.	駒込へ	2.000	10.	46.895		
	11.	座布団	1.250	11.	51.730		
	15.	筆記台	.380	12.	48.060		
	15.	公平小使	.500	合計	517.870	[1910 (明治43)]	
	15.	駒込へ	.500			*ただし、日記にある「タイムス」への6	
	19.	駒込へ	5.000			回の送金(4.9, 5.10, 6.23, 8.13, 10.9,	
	19.	公平月謝	.600			12.1.) [36円か] を入れると、553.870と	
	19.	内藤弘	2.100			なる。	
	21.	教会費	.300				
	21.	点灯料	.360			[検温記録] (人名簿欄に記入)	
	24.	新聞屋	.680	午前	正午	午後	月日
	24.	日本生命	2.800	37.1	36.9	37.4	9.29.
	24.	大工払	2.000	36.6	36.8	38.2	9.30.
	25.	家賃	9.000	36.6	36.9	37.3	10. 1.
	27.	歳暮用	4.150	36.0	36.3	36.9	10. 2.
	29.	駒込へ	2.500	36.0	36.4	37.3	10. 3.
	29.	公平葉	.500	36.6	36.9	37.7	10. 4.
	29.	北文館	.160	36.3	36.4	37.0	10. 5.
	29.	肉屋	1.000	36.8	36.8	37.0	10. 6.
	29.	米屋	3.240	36.6	37.1	37.7	10. 7.
	31.	三河屋	5.260	36.2	36.9	37.4	10. 8.
	31.	八百屋	2.150	36.3	36.4	36.9	10. 9.
	31.	牛乳屋	1.040	37.0	36.9	37.1	10.10.
	31.	洗濯屋	.090	36.8	37.4	37.5	10.11.
		[計	48.060]	36.3	36.9	37.2	10.12.
				36.4	36.8	37.3	10.13.
	[1年間合計]			36.3	37.4	37.2	10.14.
	1.	57.740		36.2	37.0	37.2	10.15.
	2.	44.560		36.1	37.5	37.3	10.16.
	3.	27.410		36.4	36.5	37.1	10.17.
	4.	49.310		36.2	36.6	36.9	10.18.
	5.	47.850		36.3	36.5	37.3	10.19.
	6.	37.060		36.4	36.9	37.4	10.20.

36.5	36.8	37.4	10.21.	36.3	36.4	36.6	11.26.
36.3	36.5	37.1	10.22.	36.3	36.5	36.9	11.27.
36.3	36.4	37.1	10.23.		[空白]		11.28.
36.3	36.5	37.5	10.24.		[空白]		11.29.
36.3	36.8	37.0	10.25.		[空白]		11.30.
36.3	36.8	37.6	10.26.		[空白]		12. 1.
36.3	36.9	38.2	10.27.	36.3	36.4	36.7	12. 2.
36.1	36.6	37.3	10.28.	36.3	36.5	37.6	12. 3.
36.2	36.6	37.9	10.29.	36.4	36.4	37.2	12. 4.
36.2	36.6	36.8	10.30.	36.3	36.5	37.3	12. 5.
36.3	36.8	36.9	10.31.		[空白]		12. 6.
36.2	36.8	37.6	11. 1.		[空白]		12. 7.
36.3	36.8	37.4	11. 2.			37.1	12. 8.
36.4	36.8	37.3	11. 3.			37.0	12. 9.
36.2	36.7	37.4	11. 4.			36.8	12.10.
36.2	36.6	37.3	11. 5.			37.2	12.11.
36.3	36.5	37.3	11. 6.			36.7	12.12.
36.4	36.8	38.1	11. 7.			36.8	12.13.
36.3	37.8	36.8	11. 8.			37.1	12.14.
36.2	36.5	36.6	11. 9.			36.8	12.15.
36.3	36.5	36.5	11.10.			36.9	12.16.
36.2	36.4	36.6	11.11.			36.8	12.17.
36.3	36.4	36.5	11.12.			37.0	12.18.
36.3	37.1	36.9	11.13.			36.8	12.19.
36.2	36.5	37.1	11.14.			36.8	12.20.
36.4	37.2	37.6	11.15.			[空白]	12.21.
36.3	36.7	37.4	11.16.			[欠]	12.22.
36.3	36.8	37.5	11.17.			38.3	12.23.
36.3	36.6	37.1	11.18.			37.2	12.24.
36.4	36.9	37.7	11.19.			37.3	12.25.
36.2	36.8	37.3	11.20.			37.5	12.26.
36.3	36.6	37.3	11.21.			37.3	12.27.
36.4	36.7	37.2	11.22.			以下 [欠]	
36.3	36.5	36.9	11.23.				
36.2	36.4	36.8	11.24.				
36.3	36.5	37.0	11.25.				

[定期支出]

津和野社	1年	70銭
東京教会	1月	30銭
同志社校友会	半年	1円
丁酉倫理会	1月	10銭
東亜協会	半年	1円
家賃	1月	9円
日本生命掛金	3月	2円80銭

奥付裏の各種日記広告頁上段メモ

十日 2 二十日 5 月末 2

〔第廿二号〕内表紙



紀元二千五百六十九年

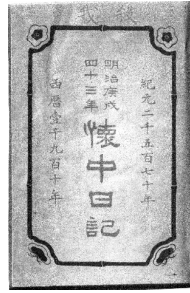
明治巳酉四十二年懷中日記 西曆千九百零九年

上部書き込み He shall not strive nor cry.

下部書き込み「不競不喧」

縦一五〇センチ 横一〇センチ、厚さ一センチ

〔第廿三号〕内表紙



紀元二千五百七十年

明治庚戌四十三年懷中日記 西曆千九百十年

上部書き込み 殺我

縦一五〇センチ 横一〇センチ、厚さ一センチ

〔第廿四号〕内表紙



紀元二千五百七十一年

明治辛亥四十四年懷中日記 西曆千九百十一年

上部書き込み 信忍勤

縦一五〇センチ 横一〇センチ、厚さ一センチ

「故増野悦興君肖像」『丁酉倫理会 倫理講演集』第一一輯（一九一二年一月一〇日）



解題

第廿三号（一九一〇年）の『日記』も、人名については姓のみで名前が分からず、現時点では人物を特定できない部分が多くある。以下、今回も『日記』から読み取れるこの時期の日本同仁基督教会の動向と増野の日常生活について解説する。

日本同仁基督教会の動向（二）

第廿二号（一九〇九年）の『日記』の翻刻後、東京目白のキリスト教同仁社団図書室（資料室）での調査と並行して、宣教師からアメリカ本部への報告書の内容も含めて、ボストンのユニテリアン・ユニバーサリスト協会

(Unitarian Universalist Association) へ手紙とメールで問い合わせをしたが、返信をいただけなかった。その後、ハーバード神学校図書館がアメリカのユニテリアン・ユニバーサリスト協会の記録の公式保管場所⁶⁷で、ユニバーサリストの日本へのミッションの記録も含まれていることが判明した。また、これらの資料の一部は、Russell Miller “*The Larger Hope, The Second Century of the Universalist Church in America 1870-1970*.” に引用されていることでもあった。ハーバード神学校図書館所蔵資料カタログにあるユニテリアン・ユニバーサリスト協会の日本関係資料リストも入手できた。これは今後調査を継続したい。

本『日記』の眼目は、宣教師ケールンとの活動である。一九〇九年八月二十八日に「ユニヴァサリスト教会」を「日本同仁基督教会」へと名称変更した米人宣教師ケールンと増野は、教会の刷新を相談している。この時の名称変更については、“*The Larger Hope*” (p.427) では次のように記している。

So *Uchu Shinkyo* was dropped in 1906 and the English words “Universalist Church” were used until some other designation could be found. Those words, being completely foreign and therefore meaningless to the Japanese, had to be discarded, and in 1909 a new name was decided upon which met with the unanimous approval of the Japanese Universalist ministers, namely *Nippon (Nihon) Dojin Christio (Kiristio) Kyok (ku) ai*. This was translated either as “Japanese Impartial Love Christian Church” or, more euphonioulsy, as “Japanese Christian Church of Impartial Love”⁶⁸ The new name had been suggested by Hoshino.

67 Universalist Leader 12 (27 November 1909): 1515-16.

そのため、一九〇六年に宇宙神教の名は廃止され、他の呼称が見つかるまで英語の「Universalist Church」が使われた。この言葉は日本人にとり全くの外來語で、意味をなさず、捨てなければならなかった。そして、一九〇九年に、日本のユニバーサリストの牧師たちが満場一致で承認した新しい名称である「*Nihpon (Nihon) Dojinn Christo (Kirisuto) Kyok (w) ai.*」が決定された。この名称は星野が提案し、「日本同仁基督教会」と命名された¹⁵⁰。

67 Universalist Leader 12 (27 November 1909):1515-16.

この「by Hoshino」が「by Mashino」の誤認で、同本の索引には「Hoshino」と「Mashino」も出ていない。ハーバード神学校図書館に *Universalist Leader* 12 を照会したところ、ライブラリアンの協力で同紙二四頁分のスクリーンデータを送付していただいた。米国の資料中に初めて「Y. Mashino」の名と写真、増野の英文報告「A Summer Vacation in the House of Our Father」を確認できた。印字が不鮮明で判読に時間がかかるが、詳細については『日記』(三)の翻刻時に紹介・解説をした¹⁵¹。

増野は飯田町教会での祈祷会草稿で、沖津の葬儀（八月二三日、本『日記』の「故沖津記念」は一年後の一九〇九年八月七日）後、ほごない時期に以下のように記している（明治四十二年秋以降飯田町祈祷会草稿）。

1、「称へラルベシ」一名ハ実ノ賓ニ過ギズ一教会刷新ノ要旨

教会ニ於ケル at home ノ意義、心霊ノ向上

2、空間上ノ聖別ト時間上ノ聖別―空気作成(魚下水)

「ケールン」氏ノ宣言(本会ノ根本的性質)

○哥後 三6 霊ハ生カス The Spirit giveth Life.

「ケールン」氏ノ為メニ自由派三教会過去ノ功績を陳ズ

(1)「ユニテリアン」派ト他教

(2) 独逸派ト聖書

基督ノ生前処女ノ如クナリシ弟子等基督ノ死后脱兎ノ如ク変化セルハ何故ゾ

此ノ経句ハ之ヲ説明セリ

1、彼等ハ神ニ頼レリ、斯クテ彼等ハ祈レリ

2、聖霊ハ彼等ニ降レリ、彼等ガ祈リシ故ニ

見ルベシ祈禱ハ彼等ノ活機ナリシコトヲ

「哥後 三6」は新約聖書の「コリント人への第二の手紙」第三章6で、次のとおりである。

「神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである。それは、文字に仕える者ではなく、霊に仕える者である。文字は人を殺し、霊は人を生かす」(日本聖書教会『新約聖書』一九五四年改訳、二八〇頁。以下、『新約聖書』)。

増野はこれを、「霊ハ生カス The Spirit giveth Life.」と記したのであり、じり貧に落ち入りそうな教勢を立て直しを目指したのであろう。教会名の変更は新たな伝道体制づくりの第一歩であった。増野はケールンと相談して、「名ハ実ノ實ニ過ギズ」として、教会刷新はそれまでのユニバーサリスト教会の伝道姿勢を具体的に強化するよう提言したと考えられる。それはケールンによる一五冊の小冊子の作成と普及による布教活動であったとみてよい。病床に伏すまで、増野はケールンの著作と冊子の刊行を、翻訳と校正も含めて精力的に行っている〔三月五日～四月四日、五月二八・三一日、六月二五日、八月二五日～二二日、九月一三日～一三日〕ことが『日記』からうかがえる。日本同仁基督教会から刊行されたケールンの著作（キリスト教同仁社団蔵）は、編年順に並べると次のとおりである。

- 〔小冊子7〕『同仁基督教会の要旨並びに価値』一九〇九年九月二五日
- 〔小冊子2〕『夢想と実生活勝利の生涯』一九〇九年九月二五日
- 〔小冊子1〕『進歩的基督教と日本の近代思想』一九一〇年一月八日
- 〔単行本〕『日本将来の宗教』一九一〇年三月二五日 日本同仁基督教本部
- 〔小冊子4〕『基督教徒となるの道』一九一〇年三月二五日（一九一四年に四版）*
- 〔小冊子3〕『活宗教の要素』一九一〇年八月二五日
- 〔小冊子9〕『必勝の教義』一九一二年一〇月二〇日
- 〔小冊子6〕『思想と品性』一九一二年二月二八日
- 〔小冊子8〕『忠君愛国と基督教』一九一三年一月六日

- 〔小冊子10〕 『聖書の手びき』 一九一三年五月一五日
- 〔小冊子5〕 『人生の意義及価値』 一九一三年六月五日
- 〔小冊子11〕 『醒めよ常に醒めよ』 一九一四年六月一五日
- 〔小冊子12〕 『神を尋ね索むる道』 一九一五年二月一日
- 〔小冊子13〕 『神の仁徳と悪の存在』 一九一五年三月三〇日
- 〔小冊子14〕 『靈魂不滅論』 一九一五年二月一六日
- 〔小冊子15〕 『子が基督者たるを誇る所以』 一九一六年二月一〇日
- 〔単行本〕 『活ける宗教の要素』 一九一六年一月 村田勤訳 日本同仁基督教会本部

(奥付で、ケールンは「日本同仁基督教会総理」となっている。表題は「小冊子3」と似ている)
* 『基督教徒となるの道』 一九一〇年一月版には「松尾音治郎^{ミナト}」訳とある。

増野逝去の五年後、「ケールン博士の懇囑」で『活ける宗教の要素』を訳した村田勤は「例言」で、「この書中には以前予が訳したのも寡くないし(中略)予の先輩である故増野悦興氏を首めとして、久しく東京同仁教会の聖壇に立たれた松尾音次郎氏、日本女子大学校教授なる松浦政泰氏の筆になつたものもあつた。この三氏は皆予の同窓にして又予の畏友である」と記している。『活ける宗教の要素』はケールンの一五冊の小冊子をまとめたもので、一〇年間の布教活動の足跡でもあつた。増野の手になる『吾徒の信条』*はケート(Isaac Wallace Cate. 一八六二〜一九〇八)から増野、増野からケールンへと引き継がれた。

したがって、第廿二号(一九〇九年)『日記』の九月二二日「内務省へ届及納本出ス」・二六日の「平野外十人

許へ冊子出ス」は、注で『吾徒の信条』と考えられるとしたのだが、ケールン著『同仁基督教会の要旨並びに価値』・『夢想と実生活 勝利の生涯』であったと考えられる。

『活ける宗教の要素』は三編（真理に基づく・行為である・生命を与える）、二〇章からなる同仁主義（ユニバーサリズム）の主張である、神は万人の父なること（第一章）・救主キリスト（第七章）・四海同胞（第八章）・断の覚醒（第一六章）などが論じられている。ケールンの主張はユニバーサリズムの神学論であり、それは増野のこれまでの信仰的実験論、聖書論、基督論の延長線上にある。増野の神学論については『増野悦興研究』第六章に詳述した。増野の神学論とケールンの著作との比較検討は今後の課題である。

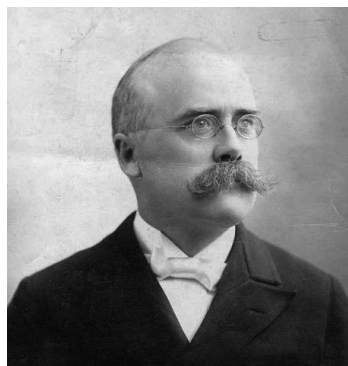
* 『吾徒の信条』（日本同仁基督教会、一九〇九年九月） 自由派基督教徒は理性の独立、霊的生命、進歩思想、堅実な品性、活気ある感情を旗幟に己と他とを救い、世を宗教的社会にする。そのために、霊なる神を信じる、神は人類の父である、人類は同胞である、耶穌基督は理想的人である、正義人道は最後の勝利者である、としている（『増野悦興研究』三七四頁）。

現時点でも米国人宣教師と増野とのやり取りが記された書簡などが見つかっておらず、ケールンと増野による協同伝道の詳細は未解明である。赤司道雄編『同仁キリスト教伝道百年史』（キリスト教同仁社団、一九九〇年一〇月）では、ケールンは「カーン」とされている。この『百年史』では増野悦興は教派の改名時以外には出てこない。一九〇七年一月一三日のユニヴァーサリスト教会（飯田町）での説教は赤司繁太郎「神の恩恵」、二月三日が同「需めに称ふ能力」、九月二二日が「耶穌の人生観」となっており、二月三日に増野は成民会で「学問の苦楽」を講演している（以上、『読売新聞』）。一九〇九年に増野が飯田町教会主事に就任し、ユニヴァーサリスト教会が日本同仁基督教会となり、赤司は去ることになった。『百年史』に増野の名が出ていない事情だと考えら

れる。

ギデオン・アイザック・ケールンは一八五四年八月二四日にインディアナ州コロンビアシティに生まれ、一八七九年、二五歳でニューヨーク州のカントン神学校を卒業、タフツ大学で学び、一九〇四年にブフェル大学で神学博士の学位を取得した。生涯をユニバーサリスト教会牧師として勤め、一八八一年に結婚した妻アンナの病で一時帰国するが、日本では延べ一〇年間布教をした。日本から帰国後の晩年にはアトランタ教会「アメリカリベラル教会(ユニバーサリストとユニテリアン)」で勤めた。ギデオン(旧約聖書士師記第六章から第八章)は士師、イサク(旧約聖書「創世記」)は太祖の一人であり、両親も熱心なユニバーサリストで、あるいはユダヤ系移民の系統とも考えられる。

肖像と牧師としての履歴は次のとおりである(“Keir, Gideon Isaac”, HARVARD DIVINITY SCHOOL LIBRARY, “Gideon Isaac Keirn”, A Journal of Tomorrow, “Universalist Leader” Nov. 4, 1922, p. 19)。



- | | |
|-----------|---------------------|
| 一八七九〜八一 | ニューヨーク州のマウントベルノン教会 |
| 一八八一〜八三 | インディアナ州のフォートウエイン教会 |
| 一八八三〜八七 | マサチューセッツ州のノーウッド教会 |
| 一八九一 | タフツ大学で牧師資格を取得 |
| 一八九三〜九九 | マサチューセッツ州のチャールストン教会 |
| 一八九九〜一九〇一 | 東京の日本宇宙神教教会本部 |
| 一九〇三〜〇九 | インディアナ州のマンシー教会 |
| 一九〇九〜一七 | 東京の同仁教会本部 |
| 一九一八〜二二 | ジョージア州アトランタ教会 |

本『日記』での増野とのやり取りを見ると、

ケールン	出状 25	来状 18	訪問 4	来訪 13	教会での説教 1
ロプデル	出状 17	来状 10	訪問 9	来訪 5	教会での説教 1
アズバン	出状 13	来状 10	訪問 11	来訪 1	
ハーサウエイ	出状 2	来状 3	訪問 2	来訪 0	

となっている。ケールンとの書簡の往復は著作の翻訳・出版の関係で、来訪も多い。

ロプデルへの訪問が多いのは、静岡教会への出張による。東京に来たときは律儀に来訪している。ロプデルの名は本『日記』ではケールン、安部磯雄に次いで多く出ている。しかし、その経歴や活動についての詳細は現時点では不明である。アズバンの日記には、一九二一年三月一日に、「ユニテリアン教会とドイツ教会を統一する問題を協議するため、ラプデル氏が上京した」（『夢が実を結ぶまで』一七九頁）とあり、教会の統合問題なども含めて地方での伝道活動をしていたと考えられる。

アズバンとの書簡の往復はブラックマーホームでの聖書講義などの関係である。

ハーサウエイはアズバンからブラックマーホームの奉仕活動を引き継いで行く。

この四人と増野との関係を知るうえで、アズバン著『夢が実を結ぶまで—ブラックマーホーム二十年の物語』（以下、『夢が実を結ぶまで』）が多少参考になる。「ブラックマーホーム二十年」の記録はアズバンの思い出と「覚え書日記」抄からなるが、来日後薄幸な少女たちを受け容れ市民として、クリスチャンとして養育した人数は八

○名に上っている。アズバンらミッシヨン委員会の努力で一八九六年に開設された「少女の家」は、米国人ブラックマー*の寄付をもとに、ケイトの奔走で一九〇三年にはブラックマーホームとして小石川区高田老松町に建設された。アズバンは日本女子大学校で授業を持ちながら、教会・日曜学校・美登里幼稚園の諸活動が続けた。一九一三年以降はホームの事務は婦人宣教師会が引き継いだ。増野咲子が日本女子大学校で教えたのもこうした人間関係からであったと考えられる。

* ルシアン・ブラックマー (Lucian Blackmer, 不詳〜一九〇九) は、アズバンが休暇で一時帰国した一九〇〇年にジョージア州アトランタでのユニバーサリスト年次総会で出会い、寄付を申し入れた。○二年一月一日の『ユニバーサリスト・リーダーズ』に記事があるというが未見である。ブラックマーは裕福ではなかったが、○九年に没するまでに六二八二・五ドルの寄付を行い、六人の娘を援助した。日本ミッシヨンへの寄付総額は一三九一七・五ドルであった(『夢が実を結ぶまで』一二二頁)。増野はここで日曜学校の校長となり、聖書講義も続けた。日曜学校のテキストの一冊が増野咲子抄訳の『シオドル物語』である。詳細は『増野悦興研究』第九章補論(3)に記した。

『夢が実を結ぶまで』にはアズバンははじめとする女性宣教師や同仁教会に集う人びとが少女たちの養育にすべてをかけていた様子がわかる。増野は三カ所に記されている。

一九〇六年一〇月一日 増野氏(初代の牧師)は、お集りの時間よりも早く来訪された。

〔一〕では「赤司氏(初期の牧師)」と記されている。一三六頁

一月一九日 はなさんは「我は命の糧なり」の一節に就いての増野牧師の説明に感謝した。そ

の一節は、分からなくて困っていた、と彼女は云った。日本人はブレッドにあたる日本語がないので、フランス語のパンを、ずっと使っていたのである。「二三九頁」

増野牧師は、ミス・ハサウエイと私に、私の留守中は出来るかぎりミス・ハサウエイを助けると約束した。「二四二頁」

ちなみに、松浦政泰編『世界遊戯法大全』（博文館、一九〇七年）の「はしがき」には、情報提供者として増野に関わりのある麻生正蔵、岸本能武太、小崎弘道、村井知至、村田勤、高島平三郎とともにミス・アズバンの名がある。

一九一〇年九月一〇日に「ケールン博士は軽井沢で書いた博士の論文を、私に読んで聞かせた。それは非常に明快な文であり、母国の仲間の人々には興味あるものだと思われる」「一九一頁」とある。この論文は『活宗教の要素』であったと考えられる。

ハースウエイは数学の教員であったがピアノ、オルガンが上手で、希望の生徒には教え、同仁教会の聖歌隊はホームの生徒でこれを指導していた（井家みつ「二つの礎石」『ハサウエー先生の思い出』五八頁）。本『日記』六月三十日の「ハサウエイ（暇乞）」は、一時帰国したためである（『夢が実を結ぶまで』一六〇〜一六一頁）。

ケート夫人エラ・ケート (Ella Cate, 不詳〜一九三八) は夫の死後日本に戻り、早稲田大学（主に夜間に）*などで英会話と演劇を教え、ブラックマーホームに関わりながら五人の子どものうち二人は米国で教育し、三人の子どもを養育した。一九二〇年に帰国後、子どもたちと暮らし三八年に亡くなっている。マサチューセッツ州メドフォードのタフツ大学のグリーククラブで活躍したケートとボストンのエマーソン修辞学校生だったエラ・スチ

ムソンはケートの日本派遣とともに結婚し、二人は一八八九年に来日した (Ione Chizuko Cate Nelson "Story of my life in Japan 1906 to 1921" [キリスト教同仁社団蔵])。

* ケート牧師は一九〇三年九月〜一九〇八年四月まで英語(会話、音読、朗読法、書取、聴取)を教えた(『早稲田大学百年史』第二巻、一九八一年、一〇六頁)。ケート夫人は一九〇九年九月〜一九二〇年三月まで、第一高等予科(政治経済学科)・同第二(独法科・英法科)・同第三(文学科)・同第四(商科)・高等師範部第一部英語科などで英語(会話、書取、音読)を教えた(同前、四一八・七三四・七五七・一〇六四・一二〇六頁)。増野はケート牧師の授業の品位を称え追悼している(「逝ける兄弟」『成民』第一〇号、『増野悦興研究』四四〇〜四四二頁)。一九一六年四月二三日には、文科学生主催の沙翁記念祭で、ケート夫人らの「補導」で英語会有志が *A Midsummer Night* 三場と *Julius Caesar* 三場を講堂に急増した舞台上で上演した(『早稲田大学百年史』第二巻、一〇六四頁)。

増野悦興の日常(二)

それまでも『日記』の見開き頁最上部に書いていたと思われるのだが、増野は年頭にあたって、それなりの想いが込められた語を朱筆で書きつけている。それらは、一九〇九年「不競不喧」、一〇年「我殺」、一一年「信忍勤」である。

「不競不喧」は昨年「(一)」の注で記したが、当時の増野の心境で、「マタイによる福音書」二二章19の「彼は争わず、叫ばず、またその声を大路で聞く者はない」(『新約聖書』一八頁)からの語で、パリサイ人に対するイエスの姿勢になぞらえて、伝道者として神の意志を広め続けたいとの決意と言えよう。

「我殺」は「マタイによる福音書」一〇章39の「自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の

命を失っている者は、それを得るであろう」(『新約聖書』一五〇一六頁)、あるいは「ルカによる福音書」九章24の「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを救うであろう」(『新約聖書』一〇二頁)からの語で、己の病を顧みない決意で伝道者であり続けたいと意志表示ではないだろうか。これより四年前の一九〇六年秋に増野はブラックマーホームでの聖書講義で、「哥前九24-27」を語っている。「一、修養ノ第一義ハ克己ニ在リ」「二、克己トハ由来消極ノ工夫ニ外ナラス」という内容で、「修養ハ小我ヲ抑制シテ大我ヲ自由ニ働カシムルノ謂ニ外ナラス」(『三十九年秋ブラックマーホーム』草稿・木村滋子蔵増野悦興文書[仮目録]〇一)と記している。

「信忍勤」は本『日記』一二月の翌月冒頭だが、「コリント人への第一の手紙」一三章7の「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」(『新約聖書』二七一頁)、あるいは「マタイによる福音書」一〇章22の「またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(『新約聖書』一五頁)からの語で、肺患の進行に対して堅忍自重して立ち向かおうとする決意のように思える。なお、三年前の一九〇七年秋の秋田教会での伝道草稿で「終まで忍ぶ者は救はるべし太十22」(『明治四十年秋 秋田伝道』草稿「キリスト教同仁社団蔵」と記している。聖書が信仰の基本だとした増野の、最晩年まで聖書を熟読し、自身の生きる力にしようとしていた姿勢が伝わってくる。

本『日記』に見られる増野の日常生活は前年同様に律儀で、定期的に断髪「一月七日」をしているが、角刈りに改めた「九月一六日」のは床に臥せる日が増えたためであろうか。来状にはほぼ返事を出している。また、静岡〜大阪伝道「二月八日〜四月五日」の無理から肺患が進行、五月には体調を崩した「五月三日・八月二七日」。九月には疲労で終日休息する日があり「九月六日」、同月一日には「向一ヶ年間休養」と記している。同月末

には一日三回の検温も始めた〔検温記録(九月二九日～十二月二七日)〕。小久保医師の来診も頻繁になり、異母弟の増野公平が同居して看病するようになった〔十一月九日〕。教会の仕事や外部との交際も病状とともに減ってゆく。米国人宣教師以外の来訪者や訪問先、書信の往来は、この年はケールンに次いで安部磯雄が二番目に多い。安部と増野とのやり取りを見ると、

安部磯雄 出状34 来状21 訪問2 来訪1

となっている。借金返済の報告も含めて、安部とは緊密に連絡を取り合っている。

増野の負債整理のために、前年の一九〇九年八月二五日、安部磯雄と岸本能武太が連帯保証人となり、小栗雄二郎という業者から二六〇円を月二分の利子で借用した。「駒込」は小栗だと考えられる。「金銭支出簿」からすると、〇九年には一五七円(九月からは五七円)、この年に二二九・五円、翌年の一年には三九・五円、逝去の前月までに合計三二六円(『日記』記載分は二二六円)返金している。財政(負債)整理時点での増野の負債総額は一〇〇〇円に上っていた(『増野悦興研究』四五五頁)。「駒込」以外にも「金銭支出簿」に記載はないが「タイムス」という業者に二四円(金額記入はないが三六円)支払っている。

一九〇九年の総支出が七八九・八四円で、うち返金が二九二・六円(五七%)、生活費などは三四〇・二四円(四三%)である。一〇年は総支出が五五三・八七円で、うち返金が一六五・五円(三〇%)、生活費などは三八八・三七円(七〇%)である。〇九年の月平均支出が約二八円、一〇年が三二円である。そのため生活は切り詰められており、「金銭支出簿」からすると、ほとんど無駄な支出がないように、物質的には厳しく過ごして

いる。夏に向けては「蚊帳」を新調（六月四日）したり、「鼠入ラズ」を購入（六月二三日）したりと、庶民の生活がかい間見える。

不思議なのはこの間、妻咲子への音信が記載されていないことである。結核の罹患を防ぐためとはいえ、妻が長男肇を連れての別居生活を続けたことは、息子に会えない寂しさもあり、少なからず病軀の増野に片意地を張らせていたのかもしれない。

「検温記録」は二カ月間、これも律儀に記録されている。午後三三度を超えた日は四日間（九月三〇日・一〇月二七日・十一月七日・十二月二三日）である。

本『日記』第廿三号（一九一〇年）での記載回数（第廿二号「一九〇九年」）の多い人物名・つながりのある人物名と回数は次のとおりである。病状の悪化と体力の衰えもあり、交流範囲と人物とがかなり狭められてきている。

ケールン 66 (70)	安部「磯雄」 58 (79)	ロブデル 46 (51)	アズバン 38 (57)
駒込 36 (42)	藤原 36 (7)	水平「三治」 34 (23)	中島「徳蔵」 26 (11)
松尾「音次郎」 23 (14)	波多野「培根」 22 (7)	佐藤 21 (33)	タイムス 18 (14)
小久保「医院」 17 (2)	松浦「政泰」 16 (14)	岡田「恒輔」 15 (34)	大熊 12 (35)
乙女 7 (0)	ハーサウエイ 6 (19)	村井「知至」 6 (41)	「増野」公平 6 (0)
西尾「幸太郎」 5 (6)	岸本「能武太」 4 (22)	「増野」自助 3 (11)	堀江「義子」 3 (18)
村田「勤」 3 (6)			

今後、『日記』第廿四号(一九一一年)の翻刻と未解明事項の調べを進めたい。

翻刻にあたり、キリスト教同仁社団、石井瑠美氏、児島康夫氏、鈴木一正氏、ハーバード神学校図書館、同志社大学図書館、早稲田大学図書館、埼玉県嵐山町立知識の森図書館にお世話になりました。御礼を申し上げます。

【訂正】

二〇二一年三月一日発行『同志社談叢』第四一号の拙論に左記の誤記がありましたので、訂正いたします。

- ・一六二頁 二行目(誤) 適用 ↓ (正) 摘要
- ・一六七頁 二行目(誤) 二千百六十九年 ↓ (正) 二千五百六十九年
- ・一七〇頁 一〇行目(誤) 〇・〇四% ↓ (正) 〇・四%